

まおう ワールドリリース
やりなおし魔王の世界解放

みつい ちづき
著者：三衣 千月

原稿用紙：96 枚

【一話：ひとりぼっちの転生魔王】

魔王は、勇者に倒された。

すべての魔力を使い果たし、魔王としての権能^{スキル}を全て手放し、与えられた役割を全て終えて魔王という舞台から降りた。

と、それが表向きの話。

魔王は、いや彼女は確かに魔王として散りこそすれ、存在は消えていなかった。
たった一つの目的のために再び生まれ変わったのだ。

○ ○ ○

元魔王城の地下。

そこに造ってあった隠し部屋の、淡く光る魔法陣の上で少女は目覚めた。

「……思ったより転生体が小さい」

黒い髪に、雪のように白い肌。そして同じく白い瞳。

持ち越したものは、少しの記憶だけ。

少女は立ち上がるが、かつての魔王としての体の半分ほどの背丈しかない。自らの手のひらを見つめ、何度か握ったり開いたりした。魔力がない以外には、他の感覚に違和感はないようだ。

手近にあったボロボロ布を体に巻く。

「部屋も随分析ちてる……」

これは、どうやら自らの計画に狂いが生じたようだと少女は判断する。

彼女の目的は、世界を統べること。魔王であった時の宿願もまさしくそれであったが、魔王という存在のままでは目的は達成できないと、ある時理解した。それゆえに、魔王を捨てた。

魔王ではない新たな体で、一から世界を統一する。そのための肉体を練成する手筈を整えてからの転生だった。

現状を把握するための材料が少しでも欲しい。

周りを見ると、^{ダガー}短剣が一本、魔法陣の傍らに落ちていた。拾い上げると、短剣に刻まれた自分の名前が淡く光りを放った。魔力を込めた魔道具だ。込められていた僅かな魔力が彼女の体を巡る。

それに伴って彼女の体にも変化が起こった。

髪の色は燃えるような深紅に。

肌は夜の雪原を思わせるような淡い蒼に。

ちりちりと彼女の周囲の空間を魔力が漂う。

魔力を体中に巡らせ、五感を強化して周辺の状況を知覚する。

「脅威になるような魔力反応は無し。でも、獣が少し魔王城に住み着いたみたいね」

かつての自らの居城である。魔王を棄てた身とはいえ、あまり良い気分がするものでもない。どのみち、今後のために拠点は必要なのだ。

城の主がいることをしっかりと分からせてやらねばならない。

短剣には^{スキル}権能が一つ宿っていた。

投擲の際の軌道修正などがある程度行える、^{スティング}投擲と名のついた低級の権能。

「さて、無いよりはマシね。とりあえず行きましょうか」

彼女の名、『アルメルザ』と刻まれた短剣は、意思に呼応するように蒼く光り、彼女の手

に収まった。

地下の隠し部屋から出て、地上へと向かう途中で城跡内を歩く獣の姿を見た。

「ヴォルブヌフ程度に居住権をくれてやるほど、私は寛大じゃないのよ」

四足歩行の肉食魔獣。その長い犬歯は獲物の肉を裂くために、その鼻は獲物の血の臭いをどこまでも執拗に追うためにある。

数体の姿を確認すると、彼女は物陰から「^{スティング}投擲」と呟き、無造作に短剣を放り投げた。

宙に放たれ、空中で加速したそれは弧を描くように急旋回して的確に魔獣の後頭部を刺す。断末魔をあげることなく絶命した魔獣から、短剣は魔力光を伴い彼女の手に戻った。

急に倒れた仲間を見て、他の魔獣数体が警戒の声を上げる。その中の一体が低く唸り、少し鼻をひくつかせたかと思うとぐるり身を返してアルメルザが身を隠している通路へと駆け出した。

「しまった、血の臭い……！」

世界を掌握するために転生したというのに、言語も交わせない下等魔獣ごときにやられるわけにはいかない。

魔力の少ない身なので直接戦闘は避けたかったが、やるしかない状況ならば逃げるわけにはいかない。

短剣を構え、彼女は通路へ出る。そして自らも獣に向かって走りだした。

そのまま先頭を走る獣に向かって短剣を投げ眉間を貫く。

残り二体。

左右同時に飛びかかれ、横へはかわせない。

しかし彼女は走る速度を落とさずに二体の獣の下を滑りぬけた。そのすれ違いざまに魔力を込めた拳で下から突き上げるように一撃。

弾かれて壁に激突した獣は、ぎゃん、と短く呻く。

残り、一体。

振り向きざまに拳を叩き込もうとするが、先の一撃を見て学習したのか、獣はむやみに飛びかかってはこなかった。

一足飛びで噛みつける間合いで、姿勢を低くして機会をうかがっている。

決して獣から視線を切らさず、しかしうっすらと彼女は笑った。

構えていた右の拳を開き何かを掴むような仕草をしてぐいと腕を引く。

次の瞬間、蒼い一閃が背後から獣を穿ち、閃光は静かに彼女の手にとまった。

一体目を倒した短剣を、魔力で操作したのだ。

相対して、わずか数秒の間の攻防であった。

壁に打ち付けられた一体だけかろうじて生きていたが、それを視認した彼女はもう一度短剣を放ち、きっちりとトドメを刺した。

「イメージどおりには動けるみたいね」

一つ息を吐き、彼女は玉座であった場所を目指す。

そこは勇者一行との決着をつけた場所でもあった。

かつての戦いの中で、知らずのうちに何か計画に不具合でも生じていたのではないかと思ひ、確認の意味を込めて見ておこうと判断したのだ。

彼女は短剣に付いた獣の血を振り落とし、やれやれと頭を搔いた。

魔王城を歩く中で気づいたことがいくつもあった。

数種類の魔獣がいたが、そのどれもが野生に存在する程度の強さであったこと。

城から見える周囲の地形に大きな変化はないこと。

城の老朽化が進み、崩れて通れない場所もあったので、少なくとも数百年は経っていること。

「計画では十年ほどで復活するはずだったのに……」

倒されたと見せかけて力を蓄え、不意を突こうとしていた彼女の計画はもはや崩れた。

なによりも、魔力が全盛期の力の足元にも及ばない。

玉座に辿り着いた彼女は、古ぼけたかつての居場所に腰をかけた。

依然、何の手がかりも掴めていない。

「これは正直な所、お手上げかな……」

頬杖をついて大きく息を漏らす。

次は城外に出て調査を進めるべきかと考えていると、玉座のある広間の中央に異変を感じた。

彼女のものではない魔力が集まり、淡く光っている。

その輝きと黄金色の魔力には見覚えがあった。

「この魔力は……！」

光はやがて陣を描き、そこに光の柱が立つ。

そして一人の男が現れた。

魔力と同様、黄金色にゆらめく髪。

いくつもの加護を得た、漆黒の鎧。

そして、かつての魔王に深く突き立てた、聖なる剣。

「勇者……だと……！？」

先ほどの推測とかけ離れた存在に、彼女は目を見開く。

数百年も生きる人間種など、いるはずがないのだ。どれだけ魔法が発達しようと、どれほど魔導技術を究めようと、命のその在りようを変化させることは不可能だったはずだ。

光の残滓を零しながら、勇者が一步踏み出す。

「勇者、勇者ディルクロイ！ 生きていたの……！？」

「憶えているようだな、俺の名を……」

勇者ディルクロイは石畳に剣を突き立て、真っ直ぐに彼女を、元魔王を見た。

「お前は、魔王、か？」

「……だとしたら、どうする？」

勇者の顔に歓喜が浮かぶ。

「仲間との約束を……果たす」

「待て待て。その前に問う。本当に勇者か？」

感じる黄金の魔力や容姿は、かつて自らが倒された勇者そのものだ。それは間違いない。

けれど、城の老朽具合から考えて、短命な人間種が生きているのは大いに謎だ。

何よりも、魔力のない今の状況で戦えば瞬く間に決着はついてしまう。圧倒的、瞬殺。そう、瞬きをする間すらないほどの一瞬で魔王は敗北するだろう。

今度こそ、すべての存在の微塵にいたるまで消滅してしまうかもしれない。

この危機を、どうにかして乗り越えなければならない。

転生早々、絶体絶命。

アルメルザは心の中で悪態をついた。

「貴様が本当に勇者だと言うならば証拠を見せろ。状況からして、私は数百年眠っていたのだろう。なぜ人間種ごときがまだ生きている」

「……証拠、か」

勇者は、勇者ディルクロイは床に突きたてた剣に手の平を向けて短く呪文を唱えた。

白く、柔らかな光が音もなく広がり玉座を、二人のいる大広間を、そして魔王城を包む半球となって領域を生んだ。

「結界魔法、聖域降陣。勇者にしか使えない破邪の魔法だ。魔王よ、よく知っているはずだろう」

「……忘れるわけが無い」

この結界魔法で弱体化されたのだから。

そして今もその効果で魔王の姿は転生直後の姿に、黒髪白肌の姿に戻っていた。

——これはマズい。大変にマズい。聖域を展開されたことで魔力がないことがバレてしまった。何か、何かこの場を乗り切る方法は——

「魔力反応が消えた……。お前、本物の魔王ではないな？」

本物だ。諸事情により魔力がない状態で転生したみたいだが本物だ。そう言いたかったが相手が勘違いしてくれているならこれは好機だ。話を合わせてここは丁寧にお引取り願おう。

「フッフ……偽者の私を殺すか？」

「影を討ち倒した所で意味はない。本物の魔王はどこだ」

「さあ、な。だが、私を倒してしまえば居場所は永久に分からなくなるぞ」

頼む！ これで退いて欲しい。一刀両断とかされたら今度はいつ復活できるか分かったもんじゃない。だって聖域展開されちゃったし、居城に。

「……ふん」

勇者が石畳に突き立てた聖剣を引き抜き、腰に収めた。

これは乗り切ったかと内心で歓喜する。

「勇者といえど人間種。身を隠していればじきに滅ぶ定めだろう。我らは身を隠しじっくり機を窺えばそれでよいのだからな」

「……残念だったな」

勇者は踵を返す。そして捨て台詞のように魔王に言葉を投げた。

「かつての仲間の加護を受け、俺は人の身を越えた。地の果てまで探しつくし、必ず目的を遂げると、そう本物に伝えるんだな。各地に残る魔王の遺物も、残らず破壊してやろう」

カツカツと音を響かせ、勇者は去った。

それからたっぷり時間を空けて、もう戻ってこないことを念入りに確認した後に、アルメルザは大きく息を吐いた。

「……助かったあ」

なんとか危機を脱した。そして我ながら良い機転の利かせ方だった。そうアルメルザは口の端を上げる。

いくつかの情報を引き出せたことも幸運だった。

「勇者め、加護を受けたとか言ってたな……」

そんな高等魔術がつかえる相手など、かつての勇者一行にはいなかったはずだ。加護で

人の身を超えるなど、どちらかといえば呪いに近い。だが事実、勇者ディルクロイは数百年を越えて生きているのだ。しかも、変わらず魔王の命を狙っている。

「一回倒したんだからそれで諦めればいいのに……」

世界を手に入れるには、必ずどこかであの勇者と対峙しなければならない。山のように大きな課題が立ちはだかったようなものだ。

対して、こちらの軍勢は自分ひとり。しかも魔力は一般人以下。

だが、他にも気になることをディルクロイは言っていた。

魔王の遺物。確かに彼はそう言った。

「むう、まったく記憶にない」

転生に備えて何かをした記憶は、一切無い。

けれど勇者がわざわざ手間をかけると言うくらいなのだから、自分の助けになるかも知れない。

もちろん、その魔王の遺物とやらがどこにあるのかも何も分からない。

「……何をするにも情報が足りない。外に出よう。外に」

城の外にも、魔獣はいるだろうが、その程度なら今の姿でもなんとかなる。

アルメルザは城にあった地図を確認し、あまり期待はせずに最も近い村へと向かうことにした。

年月が経っているのだから、元の場所に村がまだあるとは思えないが、それでも何か行動に移さなければ事態は進展しないのだ。

「元魔王自らが周辺探索とはねえ」

肩を落として、アルメルザは城の外に出た。

村へ向かう途中、やはり数種類の魔獣がいた。

自らに襲い掛かってくるものだけを素早く処理しながら進んでいたが、アルメルザはふと違和感を覚える。

「……おかしい。魔力が流れ込んでこない」

魔物として下級の存在であっても、体内に多少は魔力を宿している魔獣を倒しているのだ。自分の身に魔力的な変化が何も起こっていないことが不思議である。

今の姿は紅髪蒼肌の、ささやかながら魔力を纏った姿であるのに、だ。

「はあ、また分からないことが増えた……」

アルメルザは大きく溜息をついた。

とりあえずの目的地としている村まではまだあと半日ほどかかる。

見晴らしの良い草原の只中で、手近な岩に座り込んで周りの景色を眺める。

「地形はやっぱり変わっていないけど……あ、そうでもないな」

魔王城の方角を見返り、今更ながら変化に気づく。

「空が、青い」

数百年前、魔王の治める領域はいつでも暗雲が立ち込めていた。それは魔力を存分に含み、魔力耐性の無い者は足を踏み入れるだけで命を落とす死の領土として、人間種の侵攻を防ぐ役割を持っていた。

吸い込まれるような青い空を見上げながら。アルメルザはもう一度溜息をつく。

「いやあ、参った」

問題は山積み。謎だらけ。

解決の糸口はまるで見えない。

それでも、一つだけ、急いで解決しなければならない差し迫った問題があった。

「まさか、空腹に悩まされる時がくるとは思ってもみなかった」

魔力がなく、魔獣からも補充できない。

人間種が食事から栄養を得ていることは知識として知っていたが、魔力さえあれば存在を保てる魔族にとって、その感覚は初めてのものだった。

動きが鈍り、判断力が低下するこの空腹と呼ばれる状態を知った彼女は岩の上に手足を投げ出して呟く。

「わかった。もうわかった。もし世界を手に入れても、兵糧攻めは決してしないと誓う。これは、かなり酷い仕打ちだ」

人間種に倣って、食料を手に入れる必要があるそうだった。

魔獣は倒せば消えてしまうので、食べられそうにない。

木の実か、魔力を持たない動植物の類を見つけなければならない。

視界の端の方に遠く見える森が、村よりも先に目指さなければならない場所になった。

○ ○ ○

森の木々に成る実で喉の渴きを癒しはしたが、獣はなかなか捕まえられない。魔獣のように、こちらに向かってくるものであれば短剣を投げて仕留められるのだが、身を隠している獣を見つけるのは至難の技だった。

陽が沈んで辺りは暗くなっていく。

夜の闇は、魔王にとってさほど障害にはならないが空腹が続く状態には耐えられない。

ふと、何かが焼ける香りがした。

そちらの方角に注意を向けて探知してみれば、火を起こしている気配がする。その近くに高い魔力を持った存在もいるようだ。魔力の特徴からして、勇者のものではない。

「これは近づく以外に方法はない……！」

今の時代を生きる存在との接触は、情報を得るには最適だ。そしてあわよくば食料を手に入れられるかもしれない。

何よりも、運ばれてくる香ばしい匂いの前に、これを無視することなどできそうになかった。

静かに火の近くへと忍び寄る。

茂みの隙間から焚き火を覗いてみると、そこには誰もいない。

しかし次の瞬間、茂みの枝々がアルメルザに向かって縄のように伸びて巻きついてきた。

「なっ！ 捕縛魔法！？ しまっ……」

そのまま縛られ、上に持ち上げられる。枝からぶら下がる形で火を見下ろすがそこには美味そうに焼けている何かの肉が見えるだけだった。

縛られている枝の上から、アルメルザに向かって声が落とされる。

なんとも暢気そうな声。

「やあやあ、私の罠にかかった間抜けなあなたはだあれ？」

女性の声だ。

振り向こうにも、吊り下げられているこの体勢からでは難しい。

ジタバタしても視界が揺れるばかりだ。

「降ろせ！ おーろーせー！ 食べ物で釣るとか、アレだからな！ ズルいからな！」

「とりあえず元気みたいねえ」

声の主は枝から飛び降りると、火の横に立ってアルメルザを見上げた。

魔王も、揺られながらもそこに立つ女性を見下ろす。彼女は人間種ではなかった。

「エルフ種……！ いや、エルフ……種？」

アルメルザは困惑する。

彼女を巡っている深緑の魔力は確かにエルフ種特有のものだ。その特徴である長い耳も、ぴんと見えている。草木の新芽のような柔らかい緑の髪を後ろで一つにまとめているのも、狩猟民族であるエルフ種によく見られるものだ。

しかし。

しかしながら、体型が丸い。たぷんと、丸い。

「うーん……人間じゃないのね。そうね、この辺りには村もないから当然か。魔族にしてはちよっぴり魔力が少なすぎるけど……」

ぷっくりとした唇に指先をあてながら、独り言を続ける彼女。

くるりと火の方を向き、焼けた肉を取る。

「いいから降ろせ！ あとその肉をよこせー！」

「これはあ、私のお肉だもの。食べたいなら、せめてお名前を教えてもらわなくちゃ」

「人に名を尋ねる時は自分から名乗るのが礼儀だろうがー！」

「じゃあ降ろしてあげなーい」

「ええい、なら自分で降りる！ ^{スティング}投擲！」

短剣をなんとか取り出し、手を離す。しかし標的を追尾するように動くその短剣は地面に落ちることなく旋回しアルメルザを縛る枝を切った。

着地に失敗して「ぐべっ」と声を洩らしてしまったが、何事もなかったかのように彼女は立ち上がった。その手に短剣が戻ってくる。

「あらあ、珍しい武器。次はどうするのかしらあ？」

次も何も、彼女の手持ちの武器はこれだけで、他には何もない。
つくづく上手くいかないことの連続だ。

「それで、どうしてこんなところにいるのかしら？ えーっと、アルメルザちゃん」
「なっ！？」

「そんなに驚かなくてもいいじゃない。私、これでもエルフなんだから」

ぷくっと頬を膨らませて、彼女は言葉を続ける。

「飛んでいるナイフに名前が書いてあるのが見えたって、別におかしくないでしょう？」

風を読み、森の中で獲物を狩って暮らすエルフ種は総じて五感が鋭い。特に視覚は人間種や魔族のそれを遥かに上回る。

「……なるほど、納得した。じゃあ名前教えたから肉をくれ」

「私が勝手に見ただけだものお。教えてもらったわけじゃないわ」

手に持った肉に食いつく彼女。

「あー！ ズルい！ ズルいぞエルフのくせに一！」

「んもう、事情が知りたいだけなのに賑やかなんだから。厄介なのに見つかっちゃった」

細い木々を踏み折りながら、二人の目の前に獣よりも、二人よりもさらに大きい存在が姿を現した。

それは獣を狩る、大型の魔獣。

節足動物の足を持ち、その数は個体差もあるが概ね八～十本。膨れ上がった甲羅に、周囲を索敵するための触角が四方に向かって生えており、眼は無い。

それぞれの足の先には鋭い鉤爪があり、獲物を引き裂いて捕食する性質を持つ。

その体長は、二人を合わせたものより遥かに大きいものだった。

「タラスカドニ……！」

外装の硬いこの魔獣には、アルメルザの短剣は通用しない。

逃げるより他はない、と彼女は判断したがエルフ種の彼女はまっすぐ相手に向かって立っている。

「おい、逃げるぞ！」

「あらあ、どうして？ 倒した方が楽だし、なにより——」

言うが早いか、彼女は魔獣に向かって滑るように駆け出し、左右を問わず襲いくる爪撃をかいくぐって一瞬で魔獣の懐まで潜りこんだ。

「おいしそう、なんだもの」

甲羅の下に手を当て、大きく踏み込む。当てた手をびんと伸ばして瞬時に大きく息を吸う。

「破あッ！！！」

魔力の塊を手の先から打ち出し、魔獣を吹き飛ばす。バキバキと周囲の枝を折りながら飛ばされた魔獣は大きな木に激しく打ちつけられてその動きを鈍らせた。

「ふう。さ、アルメルザちゃん。一緒に止めを刺しましょ」

「今のうちに逃げればそれで済むだろ！？」

「もったいなあい！ 私、アレを食べにこんな辺境の森まで来たんだからあ！」

「魔獣が食えるわけがないだろう！ 死んだらただの魔力の淀みに戻るだけだというのに！」

丸いエルフは口の端を上げて、ふくよかな指を横に振った。

「そ・れ・がぁ、方法があるんだなぁ。あれだけの大きさだったらきっと美味しいから、ね、手伝って！」

よく分からないことが多すぎる。

眠っていた数百年の間に、常識までも変わってしまったのだろうか。魔獣は倒せば消える。それはつい先刻、自分の目で確かめたことだというのに。

とはいえ、知らないことを確認していけば何かの手がかりにはなるかも知れない。

自分の常識では、魔獣は食べられないものだった。しかし、美味しいというなら食べてみたい気もする。なにせ、空腹は未だ満たされていないのだから。

「むむむ……。それで、どうすればいい？ 短剣はどうせ弾かれる」

「注意を引いて欲しいの。ほんの少し、私が二、三回、深呼吸する間だけでいいから」

「……よく分かんないけど分かった。協力するのだから分け前はもらうぞ」

「もちろん。さあ、起きてくるよう」

ぎちぎちと触角と足を動かし、魔獣が起き上がる。

「確かに、動きは鈍いか……^{スティング}投擲！」

注意を引くために一投。ぎん、と鈍い音がして、当然のように甲羅に弾かれる。

しかし思惑通りに意識はアルメルザの方へと向けられたようだ。

「こい、タラスカドニ。捕食される側に回るのは初めてだろう」

爪を振り回し、魔物は吼える。いきなり弾き飛ばされた怒りも存分にあるのだろう。触角を震わせてギィィと鳴いている。

つかず離れず、木々の間に身を隠しながら何度も短剣を投げては居場所を知らせる。時にはあえて近づいて横風ぎに一閃された爪を寸前でかわしたりもした。

「そういえば、触角や関節は硬いのか……？」

木の陰から、関節の隙間を狙って一投。

風を裂いて飛んだそれは、複雑に爪の間を抜けて足の一つの付け根に刺さった。

「ギイツ！ ギイイイイ！！」

「お、やった！」

だが、逆に刺さった短剣は魔物に食い込み、アルメルザが呼び戻そうとしても固定されて動かなかった。

「ああっ！ しまった！ 唯一の武器が！」

一本の足の動きを止めたところで、他の足はまだある。動きにも支障はないようだ。正真正銘、逃げの一手しかなくなってしまった。

エルフがいるはずの焚き火の方を見れば、誰の姿もない。

「もしかして騙された！？」

自分を囷にして、彼女だけ逃げたのではないかという考えがよぎる。

アルメルザの体よりも数倍の大きさの魔獣が木々の間を抜けてやってくる。

「今、失礼なこと言わなかったあ？」

木の上から声がする。彼女の声だ。

それはちょうど魔獣の頭上、甲羅の中央に向かって飛び降り、落下姿勢のまま拳を構える。拳の周りに、翡翠色に輝く魔力が巡っていた。

「せええええいッ！」

魔力と体重を乗せた、重たい一撃。

衝撃波が辺りの葉を、そしてアルメルザの髪を揺らす。

甲羅に放射状に亀裂が入り、それぞれの足は地面にめり込む。

魔獣は、断末魔の叫びを上げた。

「キイイイイ……イイ……」

どろりと、その体が黒く淀み、溶けはじめる。

ああ、やはり魔獣はそのまま消えてしまうのだ。

「今だぁッッッ！！！」

エルフは放った拳を引き戻さずに魔力を集中させた。彼女の拳が輝きを増す。

「聖導ッ二連撃ッッ！！！」

白銀の魔力が弾けて溶けかかっていた魔獣の、淀みだけを消し飛ばす。

霧散した魔力の中心には、ほかほかと湯気をあげる魔獣だったものの姿だけがあった。

○ ○ ○

結論から言えば、魔獣だったものはとても美味かった。

火を囲んで食べる魔獣の肉は、弾けるような食感で、濃厚な旨味とやらが詰まっていたらしい。アルメルザには詳しく分からなかったが、エルフ種である彼女がそう言いながら食べていた。

彼女の言うところによれば、死の間際、消えかけている時だけその魔力のみを払い去ることができ、上手くいけば形だけは残るのだそうだ。

技の習得には数十年はかかるという。

「そこまでして食べようと思ったのはある意味すごいな……」

「なによ。メルザちゃんだってたくさん食べてるくせに」

「実際、美味しい。食事などしたことがなかったが、これは美味しい」

「それで、どうしてこんな辺境にいるのかしら？」

アルメルザは逡巡した。

元魔王であることを明かしても問題ないだろうか。

まともにやりあえば、短剣の投擲も当たらないだろうし、先ほどの打撃を受ければやはり終わりだろう。

「わけありかしらあ？」

「かなり深い事情がある。が、なんとなく隠しておくのも気が引ける」

それは彼女の、アルメルザの率直な気持ちだった。

このエルフ種の持つ柔らかな雰囲気があるのか、それとも同じものを食べていることに親近感を覚えたか、はっきりとは分からなかった。

「それじゃあ、自己紹介。私はマルゥ。見ての通りのエルフ種よう」

「……知っているエルフ種と違う点が多すぎるけど、名前と見た目が一致していることはよく分かった」

「ああ、そうかしら？ とにかく、お互いに名前を知ったから、これでお友達ね」

「変な理屈だな」

「いいのよう。私、お友達には力を使わないって決めてるの。それが例え魔族であっても」

「それは良かった。あんなのを叩き込まれたら、ひとたまりもない」

火のそばで、二人は笑いあった。

自らの転生不良の謎は解けていないが、今の世界の住人と関係が結べたことは進展と言える。

そしていくつかの情報を聞くうちに、やはりかつて村があった場所は既に何もなかったのが分かったので、アルメルザの城へと引き返して他にも情報を交換することにした。

交換とは言っても、アルメルザからマルゥに渡せる情報はほとんどないのだが。

マルゥは、自らの事をエルフ種であると言う。

それは、疑いようのない事実だ。魔力の質からしても、耳や視力の特徴からしてもそうだろう。

だが、アルメルザが知るエルフ種の中に、彼女ほどふくよかな者はいなかったし、彼女のように自らの拳を武器にする者もいなかった。

彼らは森と共に暮らし、罾を多用して獲物を捕らえる種族だったはずだ。直接的な戦闘は好まず、魔力を巧みに利用した遠距離からの攻撃を得意としていたと、そう記憶している。

「それは偏見だよ、メルザちゃん」

「変わり者もいる、と」

「そうだねえ。一般的では、ない、かなあ」

「そもそも、ぽっちゃりしたエルフがいたことに驚きだ」

「うん、エルフ初の快挙じゃないかなあ」

「別に褒めてないからね？」

城に戻ると、勇者が遺した結界の効果によって魔族であるアルメルザは弱体化し、黒髪白肌の姿になった。

マルゥはそれを見て、体と若葉色の髪を揺らして笑う。

「私も普通じゃないけどお、メルザちゃんも変。魔族なのに、魔力はとっても少ないし、結界の中の城が住処だなんて」

「事情と野望と事故が同居した結果だから仕方ない。その辺りも説明する」

「このお城がボロボロなのも関係あるの？」

「大いにある」

嬉しい誤算といえば、結界のおかげで魔獣の類が城から消滅したことだった。

勇者め、知らずの内に魔王の危機を減らしているとは夢にも思うまい、とアルメルザは心の中で喜ぶ。

かつて参謀室として使っていた一室にマルゥを案内し、そこで地図を見ながらこれまでの経緯を説明する。

自らがかつて魔王であったこと。

世界を手に入れるために再びよみがえったこと。

数百年経ったというのに、人間である勇者が生きながらえていたこと。

それらを聞き終えたマルゥは腕をたぷんと組んで考え込み、そして言った。

「ねえ、メルザちゃん。世界を手に入れて、どうするの？」

「……ふむ」

転生する前の自分は、何か重大なことに気が付いたような気がするのだ。

世界を手に入れることは間違いなく自らの願いとして憶えているが、なぜ世界を手に入れようとしているのか、その理由が思いだせない。

「メルザちゃんは昔の魔族みたいだけど、今は種族同士の争いなんか無いよ？」

「まあ……エルフ種が食べ歩きの旅に出られるくらいだからな。平和、なのかもな」

「私、平和だから旅に出たわけじゃないんだけどなあ」

「なに、別に全てを思いのままに牛耳るような真似はしない。別に、支配をしたいわけではないんだ」

「じゃあ、どういうこと？」

「それがどうにも思いだせない」

「やっぱり変なの」

そこでアルメルザは気が付いた。

自らが転生した、地下の隠し部屋。あそこなら、何かまだ手がかりが残っているかもしれないと。

マルゥを連れて隠し部屋の入り口に向かったがしかし、地下室への通路は固く閉ざされていた。

「この先に何かあるのお？ 結界、すごく強く張ってあるみたいだけど」

「地下室に何か手がかりがあるかと思ったが、おのれ勇者めえ……」

ぎりぎり拳を固めて壁にぶつける。少し、手が痛かった。

勇者と言え、と彼の去り際の台詞を思い出す。

「なあ、マルゥ。魔王の遺物って、聞いたことあるか？」

「あるよう」

「教えてくれると嬉しい。正直なところ、まったく記憶にない」

勇者が気にかけるほどのものだ。きっと何かの助けになるはずだ。

いや、なって欲しい。なってくれ頼むから。

「えっとねえ。魔王の力が込められた装備で、すごい力を秘めてる……らしいの」

「胡散臭い。力を込めた覚えがない」

「今、一つ持ってるよう」

「ほんと！？」

マルゥががさごそと指輪を取り出す。

一見すると何の変哲も無いが、微かに魔力が感じられた。

「前に寄った遺跡に置いてあったんだけどねえ。私がつけても変化がないの」

「……まあ、ニセモノでも少し落ち込むだけで済む。つけてみてもいい？」

「どおぞ。メルザちゃんなら何か変化あるかも知れないし」

手渡された指輪をつけると、にわか指輪は熱を帯びはじめた。
それは、アルメルザと同じ紫紺の魔力が放つ小さな奔流だった。

指輪に、光る文字が浮かび上がる。『アルメルザ』と確かに輝いたそれはやがて落ち着き、
そして彼女は記憶をわずかに取り戻した。

「……なるほど。どうやら本格的に私はこれを集めなきゃならないみたい」

「なにかわかったの？」

「これは間違いなく私が遺したものだ。分からなかったのも当然。昔の私は記憶と権能を
封じて各地に分散させたいらしい」

いったい何のためにそのような手間をかけたのかは分からないが、私のことだ。きっと
必要があったからそうしたのでらう。

詳細は分からないが、やるべきことは分かった。今は、それで充分だ。

指輪に封じられていた権能は、肉体の活性化を施す治癒魔法だった。権能名、^ノア^ア活性。効
果が最大限に発揮されれば、四肢の再生なども可能なものだ。ただ、その一部だけが指輪
に封じてあった上に、現在のアルメルザではちょっとした傷を治すくらいがせいぜいだろ
う。

「それじゃあ、メルザちゃんは遺物を探しに旅に出るんだねえ」

「そうだな。マルゥはどうする」

「私も、目的があって各地を回ってるんだあ」

「次は何を食べにいくんだ？」

「んもう、食べ歩きはオマケだよ」

丸い頬をさらに丸く、ぷくう、とふくらませてマルゥは言った。

いくつかの遺物の場所の記憶も、指輪の中にはあった。

地図でそれらの場所を確認していく。その中の一つに運よく、マルゥが次に向かうとい
う場所もあった。

「行き先が一緒なら、私がメルザちゃんの護衛をするよう」

「助かる。見たところ距離もあるし、一人じゃキツイ」

「お友達価格で請け負いましょう！」

ぼむん、とマルウは胸を叩く。

「転生したばかりで無一文なのに。払えるものなんか……」

「それじゃあ、目的の町までのご飯の準備はメルザちゃんがやってねえ」

「それぐらいなら、まあいいか」

こうして、二人は連れ立って城から旅立つこととなった。

目指す目的地は、山を越えた先の港町トルロイ。

城から出て結界の範囲から逃れると、再びアルメルザは紅髪青肌の姿に戻った。

指輪に封じられていた魔力効果で、少しだけ容姿が大人びたが、わずかな変化だったため二人とも気づかなかった。

【二話：港町トルロイ】

気軽に食事の準備をやると言ったことを、アルメルザは後悔していた。

獲物自体はマルゥが仕留めてくれたのだが、なかなか量が多い。彼女が言うには、旅のために必要な食事量らしいが、山と積まれた果物や獣類、鳥類を短剣一つで捌いていくのは大変な作業だった。

「ねえ、マルゥ。丸焼きでいいんじゃない？」

「ダメだよ。ちゃんと護衛代分は働いてもらわないと」

「くそっ、このぼっちゃりエルフめ……！」

「えへへ、ありがとー」

「だから褒め言葉じゃない」

小型のものならまだいいが、大型の獣までいとも簡単に仕留めてくるのだからたいしたものだ。

問題は、短剣一つで処理するには限界があるということである。

だが、アルメルザはふと考えた。

指輪をつけた事によって多少は魔力が増えたのだ。投擲以外にも幅が広がったのではないかと。

短剣に集中し、魔力を短剣に留めるように流す。

そしてそのまま肉を裂いてみる。

「……おお！」

力をあまり入れなくても、なめらかに切れていく。

「これは使える！」

そこからのアルメルザの動きは速かった。さらに数をこなすうちに、より効率的に切れるポイントも分かってきた。転生前は魔力に任せて大技を放っていただけの彼女にとって、

対象を観察するという行為ははじめてのことだった。

「はいはい、どんどん準備してねえ。生肉は嫌だよ」

「少しくらい手伝ってくれてもいいのに」

「食事の準備が対価なんだから文句言わな一い」

「くそっ、魔力さえ潤沢ならばすぐに灼けるのに……」

日が傾くまで時間がかかり、やっとのことで用意された食事は、それよりも遥かに短い時間でマルウの腹の中に収まった。

食べっぷりのよさに啞然としながらアルメルザは考える。

魔族は、魔力で体を維持するので食事を必要としない。だが、他の種族は当然のように食事を必要とするのだ。

それを考慮した上でも、マルウは食べ過ぎなのではないかと感じた。明らかに、彼女の体よりも食べたものの体積の方が大きいのだ。

「食べたものはいったいどうなっているんだ……」

「魔力とかに変換してるんだよう。いざって時に魔力切れじゃあ困るから」

「わざわざ他の物を介して取り入れるなんて面倒」

「でも、今はメルザちゃんも食べないとダメなんでしょう？」

「そうだけどさ。あ、こら。こっちの分まで食べようとするな」

その日はそのまま火の近くで野営をして、次の日に二人は山へ足を踏み入れた。

○ ○ ○

木々の少ない岩山を縫うようにして、さびれた道が続いている。

魔王城のあたりは辺境であり、近くに村もないことから、そこへつながるこの道が整備

されずに荒れているのは当然のことだった。

山頂までに数度、魔獣に襲われはしたが危なげなく撃退できた。

基本的にはマルゥの一撃で仕留められたし、漏らしたものはアルメルザが即座に投擲で対応した。

山頂からは、麓のその先に港町が、さらにその先に広がる海が見えた。

「あそこが港町トルロイだよ。私は山を降りたら別の場所へ向かうから、そこでお別れだね」

「町へは寄らないのか？」

「うん。山を降りたらあとは町までそんなに距離もないし、メルザちゃん一人でも大丈夫」

「そっか。じゃ早く行こう。のんびりしてたら今日の分の食事も用意しろとか言いかねない」

「私がかまわないよ？」

クスクスと笑うマルゥの腹を、アルメルザは軽く小突く。

「この肉の維持は私には荷が重い。自分で用意して自分で食べて」

「あー、エルフ差別だー」

「……そういえばエルフ種だったな。あまりにも丸いから忘れてた」

「丸さ関係なくない！？」

そして街道をくだって山を降りると、町まで続いている街道が見えた。マルゥは町から離れた方角へ向かうと言うのでそこで別れを告げる。

「世話になったな」

「うん、またねえ」

ひらひらと手を振り、ふくよかなエルフは去っていった。

彼女の目的とやらは知らないが、アルメルザにはなすべきことがある。

魔王の遺物を集めて記憶を取り戻すことがその近道になるのだ。
他のことに気を回している余裕はない。

マルゥは何度か振り返り手を振ったが、じきに見えなくなった。
そして町へ伸びる街道を見て、アルメルザは一言「さて、行くか」と呟いた。

○ ○ ○

港町トルロイに続く街道をアルメルザは行く。相変わらず空は青く、穏やかな景色だ。
本当に、世界を手に入れるためによみがえったことが正しかったのかと自問する。

「争いがないなら、それが一番良いはずなんだけど……」

どうにも自分の中で納得がいかない。
足りない記憶や体に残されたわずかな魔力が、世界を手に入れろと叫んでいる気がする。

悲願。宿願。
成し遂げなければならないもの。

その意識だけはあるものの、マルゥから聞いた今の世界の情勢はまさに平和そのものだった。

「とりあえず、直接町を見るか……」

町が近づいてくるにつれて、港町特有の、潮を孕んだ風が頬をなでる。
その風に混ざって、何か危機感のある声が聞こえた気がした。

町とは少し違う方向だが、街道沿いの森の中から聞こえてくる。

「魔獣の気配……」

森へ意識を向け、少し分け入る。

いくつかの足音。獣たちのそれに混ざって、別のものが一つ。

だんだんと近づいてくる足音の主は、人間種の少年だった。数匹の魔獣に追われながら、からがらといった様子で逃げていた。

「くそう、来るな！ 来るなッ！」

叫びながら逃げる少年を追っていたのは魔獣ヴォルブヌフ。魔王城やこれまでの道中に幾度か相手をした四足歩行型のそれだった。

複数で一体の獲物を追い詰める習性があるので、素早く各個撃破するのが効率的だ。

「町の間人も。どれ、恩は売っておきましょうか。 ^{ステイング} 投擲！」

木々の隙間を速度を上げて疾る短剣は少年の横を掠めてそのまま一体を仕留める。

急な出来事に思わずびっくりと体をすくませる少年の前に現れ、アルメルザは短剣を手元に戻す。

そのまま残った魔獣だけを見据えて駆け出し、次々と切り伏せていく。

最後の一体が背後からアルメルザに飛びかかるが、彼女もまた地を蹴り、魔獣よりも高く跳ぶ。そのまま宙でひるがえって頭上から短剣を投げ、ほんの数瞬の間に複数の魔獣を屠ってみせた。

「怪我はない？ 少年」

「え、あ、あり、がとう」

大きく息をしながら、少年が礼を述べる。

「ああ、いや、少し血が出てる。治してあげる。 ^{ノア} 活性」

アルメルザの指輪が光り、白い光が少年の腕を包む

「……すげえ。魔法だ……」

「日常で使う生活魔法でしょ、これくらい」

その生活魔法さえ、つい数日前までは使えなかったのだが、そこは伏せておく。

「し、師匠！ ボクに魔法を教えて！」

「いやだ」

「即答！？」

見ず知らずの人間種の少年に師匠と呼ばれる筋合いはない。

「い、いや、お願い！ ボク、冒険に出たいんだ」

「お願いされても、なあ」

「そこをなんとか！」

「私は忙しいの。用事があって町に行くんだから」

「用事……」

少年はアルメルザをもう一度見る。

そして少し考えた後で、

「その見た目……魔族なんだね。もしかして、町に住む魔族の誰かに会いに来たの？」

と言った。

この言葉にアルメルザは驚く。

「いや、そうじゃない。……え、町に魔族が住んでるの？」

「え？ 普通にいるけど」

「弱いのを捕まえて労働力にしてるとかじゃなくて？」

「誰もしないよ、そんな事」

どうやら共存しているらしい。人間種と魔族が共存するなど、天地がひっくり返ってもありえないことだ。いよいよもって自分が何のためによみがえってきたのか分からなくなってきた。

そう感じて、アルメルザはつい大きく溜息をついた。

「えっと、あ！ 最近町で話題になってる噂のこと？」

「……それも違うけど、話には興味があるな」

「じゃあ教えてら代わりに魔法を教えてくれる！？」

「別にいい。自分で町に行って情報を集める」

「そ、そんなこと言わずに、どうか！ どうか！」

助けない方が良かったかも知れない。

町の情報集めの役に立つかと思ったが余計な面倒を引き込んでしまったようだアルメルザは再び息を吐いた。

少年の身につけているものを確認する。

粗末な剣に、厚手の革を重ねただけの胸当て。

はつらつとした様子ではあるが、魔獣を相手にするにはあまりにも貧弱な装備だ。

「とりあえず、町まで連れて行ってちょうだい」

「任せて！」

何はともあれ、魔王の遺物の情報を得るのが優先だ。

新しい遺物が手に入れば、きっと状況も変わってくるだろう。

「ところで少年、名前は？」

「スー。ボクはスー。助けてくれたお礼に、うちに寄ってよ」

「ありがたいけど、魔法は教えないからね」

「意地悪しないで教えてよ師匠」

「師匠じゃない。繰り返し言っておくけど、師匠じゃないからね」

押し問答をしながら、足は町へと向ける。スーが慌てて小走りにアルメルザの後を追った。

このまま捨て置いてまた魔獣にでも襲われたら面倒だが、魔法を教えてくれと言われ続けるのも面倒だ。

それに、スーからは魔力の流れを一切感じなかった。

こればかりは持って生まれた資質が大きくものを言うので仕方がない。それを突き付けるのもどこか悪い気がした。

○ ○ ○

町でスーに連れられ、町長の家へ向かう。

アルメルザの紅髪蒼肌を見ても、誰も特別な反応を示さない辺り、彼らにとって人間種以外の存在は本当に珍しくないようだ。

スーが自分を見て驚かなかったことも納得できた。

どうやら少年は町長の息子のようだった。その上、無断で町を飛び出していったらしく、彼の父でもある町長はアルメルザに感謝の言葉を述べた後、すぐさま息子を叱りつけた。

「スー！ 危ないから町の外へは出るなど言っただろう！」

「だって、ボク、冒険に出たいんだ」

「駄目だ。特に今は皆が警戒しているのだから、余計な心配までかけるんじゃない」

町長の言葉に、アルメルザが割って入る。

「警戒？ みたところ、とても平和に見えるけれど」

「町の外に現れる災獣の数が急に多くなりましてね。こんなことは今までなかったのに」

「……サイジュウ？」

聞きなれない言葉に首を傾げる。

すかさずスーがそれに対して答えた。

「師匠がさっき倒してくれたじゃないか！」

「あれは、魔獣だろう？」

アルメルザの言葉に、今度は町長とスーが首を傾げる。

どうやら、数百年前とは常識そのものが変わってしまっているらしい。このままここで質問を投げ続けてもいいが、実際に町を見て聞きまわった方が良さそうだ。

スーの話によれば魔族も共存しているというのだから。

「……ここいらの土地には慣れていなくて。変な事を言ったならすまない」

「いえ、とんでもない。事情がおありのようですから。災獣とは、字の通りに、災いを呼ぶ獣。それらが現れるのは、何か良くないことが起こる前触れと、昔から言い伝えられているのです」

「なるほど」

アルメルザが腕を組む。

魔獣にそのような災禍を呼び寄せる力はないし、ここ数日で倒してきた魔獣たちも、かつての姿と何も変わっていなかった。

だとすれば、やはり人間種の中での常識が変わった、もしくは変えられたと見るのがいいだろう。

特に、魔族と人間種が共存するなど、ありえない話だ。

町にいるという魔族に話を聞きに行こう。

「ところで、一つだけ聞きたい。魔王の遺物、というものを探しているんだけど」

「……さて、申し訳ありませんが存じ上げません」

町長が申し訳なさそうに深々と頭を下げる。

「ああ、いや、変なこと聞いた」

「ねえ師匠。よかったらうちに泊まって行ってよ！」

「ああ、息子を助けていただいたのですから私からもお願いします。お礼をさせていただきたい」

恩を売った対価としてアルメルザが最も欲しいものは情報である。

遠慮しようかと考えたが、よく考えてみれば金銭を持っていない上に食事が必要な体になったことを忘れていた。

食料を準備する手間を情報の収集にあてられるならこれは好都合だ。

「じゃあ、ありがたく世話になろうかな。路銀も尽きて困っていたところだったし」

尽きるどころか最初から持ち合わせていないのだが、そこはやはり伏せておいた。

遠方からやってきた旅人を装った方が何かと便利だろうと打算的に判断したのだ。

「では、世話の者に準備をさせますので」

「ありがとう。私は町を見てくる」

「ええ、自慢の町です。どうぞ、ごゆっくり」

「師匠！ ボクも行っていい？」

「スー。お前は家に残りなさい。まだ説教は終わっていない」

「だ、そうよ。じゃあね」

「そんなあ！」

嘆くスーを置き去りにして、アルメルザは町長の家を後にする。

港町だけあって、交易品が売られているような店や滞在者のための宿、それに飲食店や酒場などもあった。多くの人に混ざって、確かに魔族的な特徴を持った者がちらほらと見受けられた。

買い物の帰りだろうか。何か荷物を持って歩いている、魔族の一人に声をかけた。

灰色の肌に、同じく灰色の髪。周囲の人間種よりも大きな体躯をもった明らかな存在だった。

「やあ、すまない、少し話をいいかな」

「ん、おう。どうした、お嬢ちゃん。この辺じゃあ見ない魔族だな。リオルニスから船に乗ってきたか？」

気前よく返事をしてくれた魔族の男を、アルメルザはじっと見る。その顔には、困惑が浮かんでいた。

「あなたは……魔族、ではないの？」

「珍しくもないだろう。どう見ても、お互いに魔族じゃあないか」

確かに人間種とはかけ離れた見た目をしているし、魔族であることを自称している。

しかし、アルメルザには確信があった。魔族ではない。この者は、決定的に魔族ではないと、そう感じた。

魔力が無いのだ。少年、スーと同じく、一切の魔力を相手から感じるができなかった。

だから、質問を投げた。自分の知っている魔族の常識が通用しないならば、逆にもっともあり得ないことを確かめる必要があった。

「あなたには、その、親がいる？ あの、産みの親、というヤツが」

「当たり前だろう。人間も魔族も獣も、みんな親から生まれてくるもんだ」

いや、違う。

違うのだ。

魔族は、魔力に形が与えられることで発生するのだ。自我を持たずに獣の形を模すことしかできなかったものが魔獣。自我と意識を持って世に生まれ落ちるのが魔族なのだ。

少なくとも、アルメルザはかつてそれを普遍とした世界に生きていた。

これほどまでに、世界が変わってしまっているとは、思ってもみなかった。

「そう……か。ありがとう、変なことを聞いた」

「構わんよ。君のように小さな子が旅をしているんだ。何か事情があるんだろうさ」

そう言うと、灰色の男は持っていた荷物の中から果物を一つ取り出して彼女に手渡した。

「よければ食べてくれよ。何があったかは分からないが、まずは食べることさ。困ったら宿の裏の酒場に来るといい。同じ魔族のよしみだ。働き口くらいなら紹介できる」

「ありがとう。でも旅の途中だから」

「そうか。君の旅に、世界の加護のあらんことを」

男は去っていった。

渡された果物に視線を落とし、アルメルザはしばらくそこから動けなかった。

この世界は、私が知っている世界ではない。

世界は、どうなってしまったのだ。

魔族は、人間種の天敵とも言える存在だった。魔力の淀みに形が与えられ、姿を持った瞬間に、人間種への憎悪を宿している存在だった。

だがもはやそれも、遠い昔話なのだろうか。

アルメルザの真紅の髪を、海風が揺らした。

石塀にもたれかかり、アルメルザは手渡された果物を食べていた。

あれから他の者にも、人間にも情報を求めたが、やはり魔族に対する認識は彼女の常識とはかけ離れていた。

「魔力を持った存在がそもそもいないとはね……」

どの人間種からも、どの魔族からも魔力は感じられなかった。

魔法について知っているかとたずねてみても、子に聞かせるような、寝物語でしか聞いたことがないと誰もが言った。

エルフ種、ドラゴン種、ドワーフ種、そのどれもが物語の中の存在だと。

だが、そこでふと思い出す。

「マルゥは、確かにエルフ種だった。容姿は多少、まあ、アレだが。確かにエルフで、確かに魔力を扱っていた。勇者もそうだ。あの忌々しい黄金色の魔力はまやかしなどではない。決してだ」

そこへ、スーが駆け寄ってきた。

手を振りながら「師匠ー！」と叫んでいる。

「なあ、スー。私以外に魔法を使える者を見たことがあるか？」

「ないよ！ 話の中でしか聞いたことなかったけど、やっぱり本当にいたんだ！」

「それ、どんな話か教えてくれないか？」

「もちろんいいよ！」

彼が話しはじめたのは、どこにでもあるような冒険譚。

何もない村で育った人間が、世界を救うまでの英雄譚。

多くの困難と多くの奇跡をその身に受けて、全てが終われば村に帰って平穏な生活に戻るような、そんな優しい御伽話だった。

それを聞き終えたアルメルザは、思わず声をあげて笑った。

物語の登場人物によく知る名前があったからだ。

「なんで笑うのさ、師匠。ボク、この話大好きなんだから！」

「ちょっと待て、まあ待て。待ってくれ。その話、主人公に名前はないのか？」

「うん。父さんはボクに聞かせる時にはボクの名前を主人公にしてくれたよ」

そうかそうかと大きく頷き、アルメルザは言葉を続ける。

「なるほど、寝物語だものね。可笑しいのはその先。最初に出会う魔法使いの名前は何だ

って？」

「アルメルザ」

「それで、次に出会う弓使いのエルフが？」

「マルゥ。すごく綺麗で強いエルフなんだ！」

話の中では随分とクールに語られていたが、同じ名前のぽっちゃりエルフは食べることに長けた存在である、思い出すとまだおかしかった。

「最後に、一番頼りになる戦士。何ていった？」

「ディルクロイ」

「あはははは！！」

「また笑ったー！ ディルクロイはみんなをかばってくれる強い戦士なんだよ！」

ありえない。私の転生早々、命を取りにきた非道な勇者でしかない。

人間と魔王とエルフと勇者が旅に出る物語など、荒唐無稽にもほどがある。誰があの勇者などと一緒に旅になど出るものか。

もしも自分があの憎き勇者と共に旅をするようなことがあれば、いつその寝首をかくか分かったものではない。

だが、誰かが何らかの意図を持って話を遺したことだけは推理できる。決して偶然ではないはずだ。自分と、マルゥと、ディルクロイ。共通点は、魔力を持っていること。そして今の世界では他の者は魔力を持たない。

眠っていた数百年の間に、想像もつかないようなことが起こったのだろうとアルメルザは考えた。

自分の知らないところで、何か大きな物語の歯車が動いているような気がした。

「夕食を食べたら、魔法のことについて少しだけ教えてあげる」

「ほんと！？ やった！」

「でも、きっとスーは使えないと思うよ」

「……そうなの？」

少年は悲しそうな表情を浮かべる。

申し訳ない気持ちが湧くが、こればかりは仕方がない。

その時、港の方で大きな音がした。

次いで、人々の怒号や悲鳴も聞こえてくる。

「どうしたんだろう……」

「君はここに残るか、家に帰りなさい」

巨大な魔力を感知した。きっと、これは大型の魔獣だ。

今の世界では災獣と呼ばれている、まごうことのない災害だ。

魔力のない存在は、魔獣相手に何ができるか。

決まっている。唯一、逃げるだけが許された選択だ。

スーを置いて、アルメルザは港へと走った。

○ ○ ○

港にある船がいくつか沈められている。

その原因は、大型の魔獣にあった。

「パクトロマ……。あれはちょっと、対処の方法がないかな……」

海の中に潜む、軟体性の魔獣。核となる球状の塊から、幾本もの伸縮する腕が生えている。それらを船体に巻きつけ、締め上げるように船を破壊しているのだ。

「俺の船が！！」

「船なんかより逃げろお！ 町長に報告じゃあ！」

「怪我人がいる！ 誰か運ぶのを手伝ってくれー！」

港は混乱していた。

魔獣は、その本能に従って町を襲っているのだろうが、そのままにしておいて事態が良い方向へ転がることもないはずだ。

少なくとも、この町には魔王の遺物がある、と指輪の記憶が告げているのだから町を壊滅させられるわけにもいかない。

「やるしか……ないか！」

礫塊と化した船の破片や残骸を飛び移りながら、アルメルザは魔獣に向かっていく。

「獣を処理した時の要領でッ」

アルメルザに気づいた魔獣が、水中から新たな腕をしならせて鞭のようにアルメルザを攻撃した。腕の一本だけみても、自分よりもはるかに大きいのだ。かわすしかない。

紙一重で腕をかわし、振りぬかれたその上に飛び乗って、短剣に魔力を纏わせた。

「斬る……ッ！」

腕を一本、鮮やかに切り落とす。

斬られた腕は淀みとなって溶けて消えた。

魔獣は一瞬その身をすくませたが、すぐさま新たな腕を数本、海中から出してアルメルザに向かって打ちつけていく。

かわし、斬り、避けて、またかわし。

だが物量と体躯の差はどうしようもなかった。

海面すれすれに薙ぎ払われた一撃を跳びあがって回避したその無防備な所へ、別の腕が

振り抜かれた。衝撃とともに、アルメルザの体が吹き飛ぶ。

「ぐあッ！！」

半壊し、沈みかけている船の、その船体に強く体を打ち、どぷん、と海に落ちる。
さらに追撃の腕が水面下から彼女を打ち上げる。港の棧橋に鈍い落下音が響いた。

「ぐ……ふう……、^{ノア}活性ッ！」

体が光り、傷が癒えていく。しかし、勝てる算段が皆目つかない。今の一方的にやられた攻防の中で、短剣も海に落としてしまった。

多くの腕をうねらせ、波を立てながら魔獣が棧橋に近づいてくる。
その滑り気のある球体は、まっすぐにアルメルザに向かっていた。

「ヤバいな……。正直、どうしようもない」

町の住人たちはしっかりと避難したようだ。だが、この魔獣をどうにかしない限り町そのものが廃墟と化してしまうだろう。

何か手段はないかと焦るばかりだったが、そこに鋭く声が響く。

「師匠！ これを使って！」

「スー！？」

胸に一振りの杖を抱えて、スーが走ってくる。

「ギ……ギイイイイツ！」

魔獣の気配が変わる。どうやら杖に反応しているらしい。
スーを目がけて、魔獣の腕が伸ばされる。

「させないッ！ ^{ステイング} 投擲！！」

大きく手を開き、海から短剣を呼び戻す。飛沫を飛ばし舞い戻った短剣がスーに向かって伸びた腕を切断した。

「ギッ……ギッ！」

「師匠！ これ！ 父さんが、家宝の、町に、昔からッ……！」

息を切らして叫ぶようにスーは言う。

明瞭な文ではなかったが、おおまかな意味は理解できた。

手に取った杖は、すんなりと馴染む。アルメルザは感覚で理解した。これが探していた魔王の遺物だと。

その証拠に。杖が紅く輝きはじめ、刻印された彼女の名が浮かび上がる。

流れ込んでくる記憶。解放される ^{スキル} 権能。権能名、^{バルボ} 劫炎。

対象を灼くことだけに特化した、攻撃的なその権能は、例え水中であっても魔炎が消えることはない。

アルメルザは杖をかざし、宙に魔力の炎を浮かべる。

「ギ、ギギッ……」

「そうね、パクトロマは炎が苦手なものね。痛めつけてくれた分、盛大にお返しするわ。

^{バルボ} 劫炎ッ！」

炉のように赤々と燃える炎塊から、流星のように火炎弾がいくつも放たれる。

伸ばされてきたいくつもの腕を的確に、かつ素早く撃ち落とししながら、魔獣の本体へ炎が降り注ぐ。

「キィィ！ ギッ！ ギィィィィ！！」

苦悶の叫びとともに、魔獣が水中に身を隠す。しかし、消えることのない魔炎に対し、水中は逃げ場でも何でもなく、ただ遮蔽物の無い空間だった。

「焼き尽くせ！」

アルメルザが鋭く叫び、杖を振り下ろす。

彼女の頭上に浮き、火炎を吐いていた大きな炎球そのものがずるりと動き出し、徐々に速度を増しながら水中へと侵入していった。

少しの間を置いて、水中からくぐもった爆発音。

海面の一部が大きく盛り上がり、水柱を立てた。

「よし」

「うわぁ……やっぱり師匠はすげえや……」

港近辺に物的被害は出たが、魔獣はなんとか始末できた。

ちらほらと、様子を見に町の住人達が戻ってきた。

「あんな大きな災獣、見たことねえぞ……」

「あの嬢ちゃんが始末したのか？」

そして、町長がやってくる。疲れの見える顔だ。町人への指示や避難の誘導などしていたのだろう。

彼は壊れた港を見て、息を呑んだ。

「これは、一体……」

「ああ、町長さん。ばかでけえ災獣が出たんだ。船がほとんどやられちゃった」

「そしたら大きな音がしたから戻ってきてもたらこんな有様で」

スーが父親の元へと駆け寄る。

「父さん！ 師匠が倒してくれたんだよ！ 魔法で、バーンって！」

「……魔法？」

町長が怪訝そうな顔をする。

そしてアルメルザを見てその表情はさらに険しくなった。

「君のその力は、災獣のものと同じではないのかね」

「……本質的には、同じものね」

「今回の災獣騒ぎ、原因はもちろん分かっていないが、君が引き金になった可能性もあるのではないだろうか」

「父さん！？ 何言ってるの！？」

スーを手で制して、なおも町長は言葉を続ける。

「君の手にあるものは、我が家にとって、町にとって大事なものだ。なぜ、君が持っている？」

「それはボクが……」

「スーは黙っていなさい」

町長の厳しい様子を見て、町の住人達も徐々に声をあげ始める。

「そ、そうだ！ それは大切に保管しておくものだったんだ！」

「見ろ！ 炎のせいで残った船も燃えてる！」

「災獣と同じ力だなんて気味が悪い！」

異質なものに対して、恐怖を覚える。疎外する。嫌悪する。これは、時代が変わっても変わらない、一つの真理のようなものなのだろう。

アルメルザは二度、ゆっくりと瞬きをした。別に、人間種のために行動したわけではない。こうして遺物も手に入ったのだから、何も気にすることはないはずだ。

魔力を有さない偽の魔族たちも一緒になって何か喚いている。この時代で暮らすものにとって、この力は恐怖にしか映らないのだろう。非難の声をあげる者の中には、果物を渡してくれたあの灰色の魔族もいた。

「迷惑を、かけた。……これは返す。町も出よう。それでいいかな」

「そうしてもらえると有難い」

杖を無造作に町長へ渡す。

少し驚いた表情をした彼だったが、何も言わずに杖を受け取った。

「師匠はみんなを助けてくれたんじゃないか！ どうしてみんな師匠を責めるの!？」

「スー、いいんだ。よそ者が来た途端にこんな事が起きたんだから。無理もない」

「でも……！」

スーの頭に手を置き、アルメルザは静かに首を横に振る。

「ありがとう。じゃあね」

町の出口に、ゆっくりと体を向けて、射抜くようにまっすぐ前を見る。

その視線から逃れるように、怯えを含んだ態度で町人たちが道を開けた。

一瞥もくれずに、そして静かにアルメルザは歩く。

「師匠！ 師匠ー！」

スーの声にも振り返らず、彼女は一人、町を後にした。

【三話：邂逅】

港町トルロイから少し離れた森の中でアルメルザは野営をしていた。

多少は外での生活にも慣れたなと思ったが、よく考えてみれば転生してから一度も宿やベッドで体を休めていない事に気がついた。

気がついてしまった。

「なんて荒れた旅なんだろう。二回目とは思えない状況の悪さだわ……」

杖から記憶が流れてきたときに分かった。

今回の転生が二回目であることが。一度目は、他にも仲間がいたことも分かった。

具体的にどのような同行者と旅をしていたのかはハッキリしていないが、おそらく、おそらくはマルゥがその一員だったのではないだろうか。

「スーの言ってた寝物語。あれは多分、一回目の……」

そこまで口にして、思わず顔をしかめる。

あの物語では、最後に勇者も仲間になっていたからだ。

「それはない。それだけはないわ。きっと途中で話の筋書きが変わったんでしょうね。でも、旅の手がかりにはなりそう。昔の私が、私たちが、わざわざ遺したってことなんだろうから」

夜の森の中、火に照らされてアルメルザの紅の髪がちりちりと揺れた。

そこに近づいてくる気配が一つ。野獣や魔獣ではない、人の気配。

がさがさと音を立てて草木を掻き分けながら火の前に現れたのは、少年、スーだった。

「師匠！ やっと見つけた！」

「スー……」

小さな傷をいくつもつくって、少年はアルメルザの元を訪れた。
彼なりに、必死になって追いかけてきたのだ。

「町の人たち、ひどいよ。師匠があんな大きな災獣をたおしてくれたのに……」

「怖くないの？ 魔法が」

「うん、平気だよ」

すっかり夜になったこの状況で、少年を一人町まで返すのは危険だ。どうしたものかと、アルメルザは頭を掻いた。

「ボクも一緒に連れて行って」

「ダメ。楽しそうとか、憧れとかで続けられるものじゃないよ」

「……ボクのお母さんね、災獣に殺されたんだって」

意を決して放たれた言葉。真剣な表情。

アルメルザは次の言葉を待った。

「師匠は、災獣を倒してくれた。ボクが強かったら、町の人が師匠のせいにする事なんてなかったのに……」

少年の悲しそうな顔を、焚き火が照らす。

「災獣をみんな倒せるくらい強くなりたい！ だから、連れて行って、師匠！」

「……それじゃあ、少しだけ話をしようか……」

「話？ それって――」

「まあ、こっち来て座りなよ。魔法のことを、少しだけ教えてあげる」

アルメルザは、スーが隣に座ったことをちらりと見てから、火の方を見つめた。

ゆらゆら揺れる炎が、彼女と少年を照らす。

「スーは、魔法が使えないよ。どれだけ頑張っても。魚が空を飛べないように」

「でも、師匠は……」

「今の世界ができる前、遠い遠い昔は、みんな魔法が使えた。本当に、誰でも。そして、人間と魔族はとても仲が悪かった」

ぱちり、と薪が爆ぜて音をたてる。

「どうして、仲が悪かったと思う？」

「え、と……どっちかが先に悪いことをした、とか？」

「いいや、違う。争うように、決められていたの」

「誰に？」

「……さあ」

それは、創られた仮初の本能だった。理由や、理屈などはなく、ただ殺しあうように、憎みあうように定められた対の存在。それが、人間と魔族だった。

かつては、そこに疑いを持ったことなどなかった。

しかし、決してどちらかが滅びるようなことはなかった。天秤のバランスをとるように、どちらかが劣勢になれば対抗者として力を持った存在が生まれる。

魔族に勢力が傾けば勇者が生まれ、人間に勢力が傾けば自然発生する魔獣が強くなる。それが世界の在り方だった。

「許せなかった。世界のあり方を支配されているのが、どうしてもね」

「……それで、どうしたの？」

「世界を、手に入れてやろうとしたの。誰かの都合で勝手に変えられない、自由な世界を」

そこで、アルメルザは一つ息を吐いた。

「でも、一回失敗しちゃったみたい。そしたら、魔族や人間が魔力を持たないようにその“誰か”に変えられてた。だから、スーは魔法を使えない。私みたいに、昔の存在じゃないから」

「師匠は、昔の魔族なの？」

「うん、そう」

立ち上がり、スーを見下ろす。

「私と一緒に来るなら、世界がまるごと敵になる。それでもいいの？」

「ボクは……」

沈黙。炎の爆ぜる音だけが、小さく夜に響く。

「それでもやっぱり、ボクは、師匠が間違ってるって思わない」

スーがアルメルザを見上げる。その瞳は、炎を映して力強く揺らめいていた。

その決意を認め、彼女は口の端をあげて軽快に言った。

「それじゃ、一緒に行こうか！」

「ほんと！？」

「今の時代を生きる君が信じてくれるなら、私も間違っていないと思えるからね」

「ありがとう！」

「それと、スー。私は師匠じゃない」

ぴんと指を立てて、ずっと二人の間に割り込ませる。

「私の名前は、アルメルザ。よく、知っている名前でしょう」

「……ッ！ あのお話の！？ 師匠が！？」

「だから師匠じゃないってば」

スーの瞳が、輝きを増す。

彼は今、正しく物語の主人公になったのだ。

慣れ親しんできた物語と同じように、魔法使いに出会って。

魔族は睡眠を必要としない。

ただし人間種は疲れをとるためにそれを必要とする。

スーが眠りにつき、起きるまでの間、アルメルザは周囲を警戒しながらこれからのことについて考えていた。

取り戻した記憶は、過去の記憶。世界を手に入れようとしたその理由。

それでもまだ足りない。

なぜ、かつては失敗したのか。

魔力が少ない体で転生してきたのは何か意味があるのか。

きっと、他の遺物を集めればそれが分かる。

「おはよう、師匠」

「はぁ……どうしても、そう呼びたいのね」

ねぼけ眼をこすりながら起きてきたスーの頭を軽く小突く。

「なんだか、呼び慣れちゃって」

「わかった。もう諦める。さあ、出発しましょう」

「どこに向かうの？」

「氷の国、ソノハ」

「……すっごく遠いよ？」

ソノハは、徒歩で向かうならば数ヶ月はかかる。もちろん、アルメルザは素直に徒歩で向かうつもりはなかった。

「前の旅で使ってた、転移の門があるから。ここから歩いて……4、5日くらいかな」

これも、遺物から得た記憶。

一回目の旅の遺産は使うに越したことはない。

「師匠、魔法でひゅーん、って飛んでいけないの？」

「今の私は、これくらいしかできないよ。投^{スティング}擲！」

投げた短剣が宙を舞い、焚き火跡の近くに生っていた果実を貫く。

そのまま果実もろとも、アルメルザは短剣を手中に戻した。すっと引き抜き、果実をスーに渡す。

「でも、炎を……」

「あれは町にあった杖のおかげ。返しちゃったしね。あのまま持ってくると面倒なことになりそうだったから。昔の私が使ってた道具がないとダメなの。この短剣とか、あの杖とか。しかも、道具によって使える魔法は決まってる」

「じゃあ、今は魔法をほとんど使えないんだね」

「そう」

もういちど短剣を飛ばして、自分の分の果実を落とす。

手元に戻ってきた短剣を見て、ふとアルメルザは思った。

「あ、いや、待てよ。もしかして……」

アルメルザは港町の方に手を伸ばし、意識を集中した。

まだ町からそれほど距離が離れていないこともあるのだろう。微かに、遺物の魔力を感じた。

短剣を操作する時と同じ感覚で、感知した魔力を引き寄せるように手を握り、引く。

「杖よ……きたれ！」

魔力の飛来する気配をアルメルザは感じる。

やや時間を置いて、森の木々を避け、赤く揺らめく魔力をもった杖が飛来した。

「できた……！」

「杖が飛んできた！？」

今の自分と縁ができたものは操作ができるらしい。これはかなり戦力的に有用だ。町では今頃一騒ぎ起きているだろうが、それくらいは勘弁してもらおう。

「短剣だけで旅をしなくてよくなった！ ありがとう、スー」

「……ボク、何かした？」

「気づかせてくれたからね。さあ、行こう。これなら楽に旅ができる」

魔獣もすんなり倒せるだろうし、野営で火を起こす手間も省ける。

転生してはじめての、幸先のいい出発だった。

転移の門がある場所をスーに話し、そこまでに町があるかどうかを確認する。

できることならば、スーの装備を整えておきたかった。やはり革を張り合わせただけの簡素なものだったからだ。長期の冒険に出る格好ではない。

聞けば、町ほどではないが、小さな村がちょうど転移の門がある洞窟の近くにあるとのことだった。

そこまでは野営をしながらスーを鍛える計画を立てる。

決意は認めたものの、実力としては本当にただの少年なのだから。

出会った時にはヴォルブヌフからも逃げていた程度の。

○ ○ ○

道中、スーの資質を見るが、何か突出した能力がある訳ではなかった。

ただの人間種の、ただの少年だった。

「スー……君は、才能がないね……」

「でも、三回に一回ぐらいは敵に攻撃が当たるようになったよ！」

この世界を作り変えた存在が、才能などを所持させるわけがないのだから、これは当然の結果なのだろう。

魔族からも魔力を奪うほどだから、才能のある存在などいるはずがないのだ。

「成長するのは、確かに素晴らしいね」

人間種がもつ、最大の力。

それは個々の能力が進化することにあるだろう。魔族は淀みから抱えて生まれもった能力がすべてだ。

人間種から、進化の能力はまだ奪われていない。なら、時間をかければきっとスーは強くなれる。才能がなくても、きっと。

「それじゃあスー。私とも戦ってみようか」

「師匠と？ 丸焼きにされない？」

「しないしない。怪我したらちゃんと治してあげるよ」

杖から短剣に持ち替えて、アルメルザは言う。

「私に一撃当てられたらよしということにしておこうか」

「終わるまでやるの？」

「いいや。スーが気を失ったらそこで終わるよ」

「……え、なんだか嫌な予感……」

初日の模擬戦は、瞬時に終わった。

アルメルザが放ったナイフがスーの頬をかすめ、それに気をとられた隙に距離を詰められ、杖で殴打された。

それだけだった。

スーの冒険は、気絶が一日の終わりを告げることが習慣になった。

○ ○ ○

数日経ってたどりついたそこは、小さな村だった。山の麓にある、のどかな村。

交易の中継ぎに生まれるわずかな需要で成り立っている村だった。

人並みの装備が揃えられるはずもなく、少しの食料の調達と、今の装備よりはマシだと思えるスーの装備を整える。

ついでに、アルメルザ自身の外套も新調した。

「師匠、そのマントかっこいい！」

「まあ、ボロ布よりは遥かにマシだからね」

「それも魔力で動かせるの？ 短剣や杖みたいに」

「……名を刻めば動かせるけど、これがひらひらと動いたところで、何の役にも立たないからなあ」

「でもかっこいいよ」

「無駄無駄。さ、行くよ」

この村にたどり着くまでの数日、スーに対する訓練は続けられたが、劇的な変化は見られなかった。

人間種が成長をするのだとしても、さすがに数日で大きく変わることはないのだと、アルメルザは身をもって知った。

木々の多い山林に入り、アルメルザは過去の旅で使っていた転移の門がある洞窟を目指

す。

山に洞窟があることは間違いないのだが、木々の様子はかなり変化していたので、辺りを見回しながらの道行きだった。

目印にしていた道はもはや存在せず、ふもとの村で聞いてみても、この山にそのような洞窟があるとは認識されていなかった。

「ねえ、師匠。ほんとに洞窟なんてあるの？」

「……正直なところを言えば、あって欲しいけど、自信なくなってきた」

辺りを探知してみても、それらしい気配はない。

「……焼いていい？ この辺り全部」

「師匠が怖いこと言い出した」

「だって見つからないから……」

「あ！ 師匠、あれは！？」

スーが指さしたその先に、何かが輝くのが見えた。

弾んだ様子で進む二人の前に、明かりの提げられた洞窟の入り口が姿を現す。

それを見て、アルメルザは露骨に警戒の姿勢を取った。

「師匠、どうしたの？」

「村で、誰もここに洞窟があるなんて知らなかった。じゃあ、この明かりは誰が付けたの？」

「あ、そういえば……」

とはいえ、洞窟の中に入らなければ転移の門は使えない。気配を探り、洞窟の中に魔力を感じないことを確認してから息を潜めて足を踏み入れた。

獣も、魔獣もない。ただ暗い洞窟の中を、アルメルザの照らす炎を頼りに進んでいく。
内部の様子は昔とさほど変わっておらず、彼女は迷うことなくスーと二人で転移の門に
向かって進んでいた。

「……誰も、いないね……」

「油断は禁物。でも、もうすぐ門がある場所に出るよ」

少し広くなっている、洞窟の最奥。
無機質な四角い塊が広間の中央に置かれている。

「無事に残ってた。……壊れてないし、何回か使われてる」

「洞窟の入り口に明かりを付けた人かなあ」

「分からない」

もしかしたら、港町の前で別れたあのぽっちゃりエルフかも知れない。彼女は彼女で目的があると言っていたし、おそらく過去に旅をしていた仲間の一人は彼女だろうから。
記憶はないが、そんな気はしていた。

しかし、何か嫌な予感がする。

周囲に警戒をしながら、転移門の起動を試みようとしたその時だった。

がしゃん、と何かが上から落ちてきた。
それは転移門を挟んで向こう、壁際に落ちたようだった。

「岩でも……落ちてきた？」

炎をゆっくりとそちらに浮遊させる。
徐々に照らされる闇と壁の輪郭に、まったく異質なものが入り込んだ。

「……ッ！？」

それは、異形だった。

幾本もの触手が絡まりあうように球体を成し、人の顔を模した仮面が張り付いていた。触手も、仮面も、鈍い金属光沢をみせている。

^{バルボ}
「劫炎ッ！！」

反射的にそう叫び、浮いている火球から炎弾を打ち出す。

全て命中はしたが、すぐさまアルメルザは叫んだ。

「逃げるよ！」

「え。えっ！？」

「いいから早く！！」

踵をかえし、スーの手を引いて走り出す。

その背後でぐねり、と身を震わせた触手球の仮面の口が開いた。

そこから放たれた不快な音が広間に、通路を走る二人の背中に届く。

肉を無理やり引き裂くようなぶちぶちとした音、怖気がするような金切り音。それらが混ざり合ったものが響き渡った。

耳を塞ぎたくなる気持ちをこらえ、本能が知らせる危機の予感のままに走った。

あれは、魔獣ではない。

魔力など、一片も感知できなかった。しかしそれでも、敵意を持って声を発したのだからということだけは分かった。

「あれはヤバいやつだ！」

「災獣！？」

「多分、そんな程度の低いものじゃない！！」

通路の壁に金属の触手をぶつけながら、物体が追ってくる。

見た目に反してかなり速い。

追ってくる間も、ずっと不快な音を発し続けている。

このままでは、追いつかれる。

「スー、掴まって！ 飛ぶよ！」

スーを抱え、杖を振る。

火球を杖の先に留め、異形のほうへ向ける。杖に跨るように飛び乗って、叫ぶ。

^{バルボ}
「劫炎ッッ！」

炎球から炎が一筋に集約されて噴出する。

その反動で二人を乗せた杖はすさまじい推進力を得た。

「わ、わ、わああああ！」

「しっかり掴んでてね！ 洞窟の外まで一気に行くから！」

炎を吹きだして飛行する杖。それに乗り、二人は洞窟の入り口からはじき出されるように森へ出る。

勢いを殺しきれずに地面を転がり、入り口から少し離れた場所でなんとか止まる。

「いったたた……。スー、無事？」

「頭打った……」

涙目になりながら頭をさするスーを一瞥し、大事無いと洞窟の入り口に警戒を向けた。

少しの間があって、ずるり、ずるりと鈍色の触手が洞窟から姿を現す。

炎は、まるで効いていない。

洞窟から出て、開けた視界の中で見ても、やはり異形だった。

「なに、アレ……」

金属でできた存在など、見たことがなかった。

さらに、本能的に漂う忌避感。嫌悪とでも呼ぶべき感情がアルメルザの中に生まれていた。

蠢く触手球。仮面の位置がずるり、ずるりと変わり辺りを見回す。

そして、仮面の目線が二人を捉える。追い詰めたとでもいうように、おもむろに金属触手をうねらせながら向かってきた。

「炎がまったく効いてない……！」

「どうするの、どうするの！？」

「逃げるしかなさそう！」

唐突に、異形がその進行を止める。

次の瞬間、見覚えのある剣がどこからか飛んできて地面に刺さった。

剣を中心に展開されていく黄金の魔力による結界。

それは、転生直後に見たものと、まったく同じだった。

「勇者の、結界魔法……っ！」

黄金の輝きが一際強くなり、それに伴ってアルメルザは黒髪白肌の無力な状態へと変じる。

「最悪な時に最悪なヤツがきた」

「え、師匠？ 師匠！？」

スーが、アルメルザの突然の外見変化に戸惑う。

木々の間から、勇者が姿を現した。

「誰？ 助けてくれるの？」

「スー、あいつはそういうのじゃない。敵だ、敵」

勇者は無言で地面に刺さった剣を引き抜く。

触手を這わせ、異形が勇者の方へと仮面を向ける。そして先ほどのように音を発した。

「この程度の雑魚に手こずるとはな」

勇者は一足飛びに異形に切りかかり、仮面や触手をまとめて両断する。

肉が焼けるような音を断末魔にして、異形は溶けて消えていった。魔獣が消滅するときと同じ消滅の仕方だった。

「あ、ありがとうございます！」

「おい、スー！ 敵に礼なんかいらん！」

「……今の時代の人間か」

勇者はスーを見て、それからアルメルザの持つ杖に視線を向けた。

「魔王の遺物か。だが、結界の中ではどうすることもできまい」

「くそっ、お前ズルいぞ！ 自分ばかり有利な状況を作って！」

「何とでも言うがいい」

剣を構え、その切っ先を二人に向ける。

「吐いてもらうぞ、魔王の居場所を」

「……スー。逃げて。勝てない」

「い、嫌だよ！ 何が何だか分からないけど、嫌だ！」

勇者が小さく呪文を呟く。

大気は濃くなり、勇者の結界内に霧が立ち込めはじめた。

にわかに、スーが膝から崩れ落ち、その場に倒れた。

「睡眠魔法か。ずいぶん優しいな」

「用があるのは、お前だけだ」

「どうする？ 今度こそ殺す？」

「いいや、洗いざらい吐いてもらおうか」

霧が濃くなり、アルメルザの意識も朦朧としはじめる。

結界で弱体化させられた状態では、抵抗も長くは続かない。

どさり、と地面に倒れ伏したアルメルザを、勇者は静かに抱えて洞窟の中へと入っていた。

○ ○ ○

スーが目を覚めたのは、洞窟前の地面の上ではなく、麓の村だった。

辺りを見回すがアルメルザの姿はない。寝具の上に寝かされていて、どこかの部屋にいるのだとしかスーには判断できなかった。

起き上がり、そこでようやくスーは自分が麓の村にいるのだと理解した。

「やあやあ、起きたみたいねえ」

扉を開けて入ってきたのは、やはりアルメルザではなかった。

スーに声をかけたのは、やけに間延びした声で、ぽよんと丸い体つきをした女性だった。

「……ここ、は？」

「麓の村だよ。君が倒れてたのを運んだのは私。さあさあ、感謝してね」

「ボクの他には、誰もいなかった！？」

「誰もいなかったよう」

「そんな……」

女性はスープを運んできてくれたようだった。

それを手渡して、食べるように促す。

「一日丸々寝てたから、お腹もすいたでしょう」

「今は、そんな気分じゃ……」

洞窟で何かよく分からないものに遭遇し、何も分からないままアルメルザに助けられ、洞窟の外で勇者だと言われた者に会って、やはり何も分からないまま自分だけがここにいる。

アルメルザが無事かどうかすらも分からないし、自分が本当に何も知らないし何もできないのだと、悔しさでいっぱいだった。

唇を噛み下を向くスーに対して、ふくよかなその女性は柔らかな手をぽむ、と彼の頭に乘せた。

「メルザちゃんは無事だよ」

「……えっ？」

弾かれるように顔をあげ、スーは女性の顔をまじまじと見た。

「メルザちゃん、あ、アルメルザちゃんのことね。彼女は、氷の国ソノハにいるよ」

「お姉さんは……？」

「彼女のねえ、おともだち。だから助けに行くの」

そう言って彼女は微笑んだ。

「ぼ、ボクも行く！ 師匠を助ける！」

「それじゃあ、まずはしっかり食べてね。食べないと、力が出ないぞう」

短く息を吸い込み、そして吐いた。

師匠の事情は分からないが、分からないまま何もできないなんて嫌だ、とスーは強く思う。

「お姉さんの名前は？」

「そのうち教えてあげる」

「……わかった」

「代わりに、メルザちゃんと勇者の昔のことを話してあげるよう」

「昔の、こと……」

アルメルザが昔の魔族だということは聞いたが、昔に何があったのかは聞いていなかった。彼女自身も憶えていないのだから、当然スーにも分かるはずがなかった。

そして語られたのは、ある勇者とある魔王の物語だった。

【四話：境界の先へ】

アルメルザは、かつて魔王と呼ばれる存在だった。

ディルクロイは、それに対抗するために勇者として力をつけた。

そもそも、アルメルザが淀みから生まれたのは、種として個体数が増えてきた人間種を減らすため。

決してどちらかに傾くことのない天秤の両端に彼らは存在した。

互いを憎みあい、存在の消滅をかけて戦った。

だがある時、魔王だったアルメルザは疑問を持つ。

種として、個々の力として圧倒的な力をもつはずの魔族が、なぜ人間種を滅ぼしきれないのかと。

そしてそれまでの争いの記録を遡り、何者かの介入があることを確信した。

終わることの無い争いを、姿の見えない誰かに強要されていることは耐えがたかった。

だから、彼女は自らが乗せられている天秤から降りることを選択した。

勇者に倒されることによってそれを為すと決め、死の間際に、勇者にその真実を告げた。

ここまでの、最初の物語。

スーの世界では一度も語られなかった、遙か昔の世界の真実。

それをゆっくりと聞いていたスーは、沈んできた太陽を見て、それから言った。

「結局、誰が勇者と魔王を戦わせていたの？」

「それがねえ、まだ見たことないの。私たちは裁定者って呼んでたけど」

「裁定者……。神様とは違うの？」

「その呼び方はディルクくんが嫌がってさあ。あ、勇者のことね」

「今の話に、お姉さんは出てこなかったね」

「うん。私の出番はここからだから」

長い話の合間にと、温かい飲み物を用意する。

スーは考えたこともなかった世界の在り方に、実感が湧かないでいた。今の世界と、あまりにも違いすぎる。争いが絶えず、魔族と人間が憎しみ合い、他の様々な種族もそれぞれの思惑の中でどちらか、あるいは両方に加担する。

恐ろしい世界だと、彼は思った。

日はすっかり暮れ、窓にはうっすらと自分の顔が写る。

反射する光景越しに女性を見れば、彼女はどこからか取り出した干し肉のようなものを食べていた。

「それで、一度倒された魔王はどうなったの？」

「十年くらいしてから蘇ったよう。ただの魔族として。魔王の力を捨てたから、相対的にディルクンの力も弱くなっててさ。それでようやく、ディルクンも彼女の話信じたみたい」

「それから、どうしたの？」

「旅を、始めたの。人間と魔族の意味の無い争いを終わらせるために」

そして長い旅の中で、仲間が増えることもあった。逆に、減ることもあった。

「裁定者を探す旅の中で最後に残ったのは、メルザちゃんとディルクンと、私だけ」

「……そっか。お姉さんの名前、マルゥだね。エルフの」

「そ、正解。私が二人の旅の最初に出会ったんだよ。他にも何人かいたけど、旅の途中から裁定者の軍団が襲ってくるようになったから、みんな無事ってわけにはいかなかったの」

「裁定者の……あっ、あのうねうねした敵……」

「君も見たんだね。気持ち悪かったでしょう、あれ」

それでも、三人は裁定者の居場所を突き止めた。

傷だらけになりながら、やっとのことで。

けれど、そこには壁があった。

魔力持つ者のみを阻む、特殊な結界。

彼らの旅は、そこで閉ざされた。方法がなくなったが、諦めることはしなかった。

「メルザちゃんがね、もう一度やり直すって言ったの」

「生まれ変わって、魔力のない体に……？」

「そう。それまでの記憶や魔力を分割して、封印していった。裁定者に気づかれないようにするために。そして最後に、私とメルザちゃん、ディルクんに呪いをかけた」

「呪い……」

「魔族の力を人間に注いで、彼がずっと生きられるように。いつか転生してくるメルザちゃんを導けるように。いやあ、苦労したよあの儀式は」

「え、でも……」

勇者は、アルメルザを襲ってきたのだ。結界で彼女を無効化して、スーを眠らせて。

「何百年も生きてるうちに、ちょっと心変わりしちゃったみたい。一緒に裁定者に立ち向かうよりも、メルザちゃんがこれ以上戦うのを見たくないんじゃないかなあ。旅の途中からは、とっても仲が良かったし」

だから彼は、アルメルザのためにアルメルザ自身が遺したものを集めて回った。彼女にそれを渡さないように。

もちろん、彼に対して裁定者が攻撃を止めることはない。世界にとって、魔力を持つものはもはや異物なのだから。

「メルザちゃんを無力化したまま、本当のことを隠して自分だけで戦うつもりなんだよう。ディルクンは、そういう不器用な人だよ」

「そんなの……きつとつらいよ……」

「そうだねえ。私もそう思う」

「だってそれに、勇者は魔力が残ってるんだから、結界を越えられないんでしょ？」

「うん。裁定者の結界を越えられるのは、魔力のない存在だけ」

飲み物はもう、すっかり冷めていた。

マルゥは大きく息を吐いて窓の外、夜空の向こうを見る。

「隠しごとは、よくないよねえ。でも、もしもメルザちゃんが今の世界に疑問を抱かないなら、私もディルクと一緒にひっそりと戦い続ける。だって、私はメルザちゃんの味方。私からは、何も種明かしはしないよう」

「……師匠は、誰かに支配されてる世界は嫌だ、って」

「やっぱり、メルザちゃんはそうなるんだねえ。じゃあ、ディルクを止めにいこうか」

「勝てるの？」

「んもう、私だって、数百年ずうっと生きてるんだよお。それなりに強いんだから」

ぷくりと頬を膨らませてマルゥは言った。

そしてスーに向かって、

「でも、今なら、まだ引き返せるよう」

と言った。

もちろん、スーはアルメルザの元へいくつもりだった。なぜ、そんなことを言うのだろうと疑問に思う。

事情を知った今、なおさら引き返すなど考えてもみなかった。

夜遅くまで語られた、世界の過去の物語。

それはスーがよく聞かされて育った物語とは違った部分も多くあった。

「ボクも行く。師匠には、助けられてばかりだから」

「うん。きっとそう言うと思った」

「ねえ、少し聞いていい？」

スーの質問に、丸い顔をちょこんと傾げながらマルゥが先を促す。

「ボクが知ってる話は、誰が作ったの？」

「……ああ、うん。あの時旅をしたみんなで。もし、誰も裁定者の所から帰れなくなっても、何かを遺したかったんだと思う」

「そうなんだ」

「どうしてそんなこと聞くの？」

「あの、その……」

スーの視線が、マルウの顔や手足を往復する。

「知ってる話だと、エルフのマルウって、すごく、その……」

「痩せてたって……言いたいんだあ。今はぷくぷくだもんねえ」

「あ、あの、でも！ 変じゃないから！ 変じゃないから！」

「昔は痩せてたんだよ……」

落ち込む素振りを見せるマルウをあわあわと慰め、夜は静かに深くなっていった。

少年の物語は、終わることなく続く。

自らを助けてくれた魔法使いを、今度は少年みずからが助けると、そう心に誓った。

○ ○ ○

旅の支度を整えながら、スーは昇ってくる朝日を見る。

旅を始めてから、一人で見ると朝日はこれがはじめてだった。いつも、隣にはアルメルザがいた。

「師匠……」

昨夜聞いた話は、壮大なものだった。自分に何ができるだろうかと自問してみる。

戦闘の役には立ちそうにないが、だからと言って何もしないというのも違う気がする。

「起きてきたねえ。スー。それじゃあ、行こうか」

「……うん」

スーとマルゥ。二人は山に入り、移動しながら食事を取りつつ、転移の門があった洞窟に向かう。

洞窟の入り口にかけられていた明かりは、マルゥが用意したものだったとその時に聞いた。

勇者の結界が張られているため、洞窟に魔獣その他の存在はなく、すんなりと転移の門に到着した。

「さあ、いくよう。氷の国ソノハに！」

マルゥが転移の門に魔力を込める。

ただの石に見えていたその表面に、いくつも魔力の筋が入り、周囲の空間そのものが歪んでいるようにスーは感じた。

頭の中を直接揺さぶられたような気持ち悪さが一瞬だけスーを襲う。

直後に視界は白く染まり、それが収まった時にはまったく違う風景が二人の前には広がっていた。

一面の、銀世界。

空は青く晴れ渡り微風もないが、見渡す限り一面の雪原だった。

「うわぁ……」

初めて見る光景に、スーは言葉を失う。

そしてしばらくの後、当然の感覚に襲われた。

「寒い！！」

「あ、そうか、人間にはちょっと寒いなあ」

マルゥは呪文を唱え、空中に青く光る穴を作った。

「なに？ それ」

「んー、収納魔法。いろんなものが入ってるんだあ。食料とか、他にも……お、あったよ
う」

穴の中をごそごとやっていたマルゥが何かを掴み引っ張り出す。

それは深い緑色をした、一枚の外套だった。

「マント一枚じゃあ足りないよ」

「着てごらん。魔法のマントだから」

半信半疑でそれを身に付けた途端、一切の寒さを感じなくなった。それどころか、少し
温かい。

「うわぁ……！」

「ふふーん、魔法はすごいでしょー」

「すごい！」

「便利すぎて魔法そのものを裁定者に消されちゃったけどねえ」

「それじゃあ、その裁定者を倒せばみんな魔法を使えるようになるの？ ボクも？」

「うーん、分からないなあ。どうなるかは、やってみないと」

「使えるようになるといいなあ」

雪原をひたすら歩く。

だが、歩いても歩いても何も見えてこない。地平の先まで雪原が続いている。転移の門
があった場所も、もう見えなくなってしまっていた。

「ねえ、氷の国ってまだ遠いの？」

「もう着いてるよう？」

「え？」

ただ、何もないこの場所がそうなのだろうか。

船で交易をしている人々から聞いた話によれば、大きな城の周りにいくつもの町が並んでいる都市国家だと、そう知識にはあった。

城はおろか、都市も人影も何もない。

「ちょっと前に、ここで勇者と裁定者の戦いがあったの。その時に……」

「壊されちゃったの？」

「ちょっと違うかな」

改変されたのだ。

裁定者が勇者を襲った時に、その存在を氷の国に知られた。勇者の存在や魔法の存在についても。

だから、なかったことにされた。

町そのものを。国というものを。そこに息づいていたすべてを。

「消された……ってこと？ 裁定者に」

「……うん。みんなの記憶からも、徐々に消えていくよう……」

それほどまでに、世界というものは簡単に変わってしまうのかと、スーは恐怖を感じた。

やるせなさそうに呟くマルゥと共に、何もない哀しい風景を歩いていった。

○ ○ ○

雪原の中で、急にマルゥが立ち止まった。

「ふう、やっと着いた」

「何もないよ？」

「んふふ、何もないように見えるだけ」

彼女は地面に手を置き、「^{ランノン}結界解呪」と呟いた。

置いた手を中心に、雪が溶けていく。

溶けていくように見えているだけで、実際には元々あった風景がその姿を現しただけだ。

雪原の中にあるには不自然極まりない、石造りの小屋が規則的にいくつも並んだ景色が現れた。

「昔から私たちの拠点だったのがこの場所。今は、ディルクくんしかいないけど」

「じゃあ、ここに師匠も……」

「おうい、ディルクくん。いるんでしょー」

マルウがそう声をあげる。

何も反応がなかったが、しばらくしてから石造りの小屋の一つからディルクロイが姿を現した。

黄金の髪に、黄金の瞳。

まっすぐにマルウを見た。

「何の用だ」

「メルザちゃんを返してもらいにきたよう」

しばしの沈黙。

黄金の瞳が、今度はスーを見据える。

「……アルメルザは、俺が守る。遥か昔に、約束した」

右腕を上げ、すっ、と振り下ろす。

魔力の風がマルゥとスーに襲いかかり、吹き飛んだスーは石小屋の壁に衝突した。

「はあ。そのために自分が嫌われ役になってもいいって言うんだから、始末に負えないよねえ」

両拳を握り、ずどんと地面を蹴ってマルゥが駆ける。ディルクロイとの間合いを一瞬で詰めて右の拳を繰り出す。

半身でかわされたが、すぐさま引き、左の拳を。ディルクロイは剣の鞘でそれを受けた。

とん、と跳びあがり拳を組んで振り下ろす。

対してディルクロイは組んだ腕に魔力を流してそれを受け止めた。

互いの魔力の衝突はすさまじい魔力波を生み、大気が震えるほどだった。

「守るのはいいけどお、メルザちゃんがどうしたいかの方が大事でしょう！」

「貴様に、何が分かるっ！」

黄金の魔力を纏わせ横薙ぎに剣を振るい、マルゥの横腹に直撃させる。魔力の守りによって刃は通らなかったが、お構いなしにディルクロイは剣を振り抜いた。

「おおおおっ！」

投げ飛ばされたマルゥは地面を転がる。それを追ってディルクロイも駆けた。

マルゥが体勢を整えるよりも先に魔法による追撃が彼女を襲う。

ディルクロイの周囲にいくつもの光球が浮かび、針のような光線が無数に放たれた。

「なんて容赦のないっ！」

上半身だけを地面から起こして、腕を突き出して障壁を張る。光線の雨は嵐のように激しく魔力障壁を撃つ。

「スーくん！ 今のうちにッ！」

二人のすさまじい攻防に見入っていたスーは鋭い声を受けてハッと我に返った。
そしてディルクロイが出てきた小屋に向かって一目散に走りだす。

「させん！」

「こっちのセリフだよ！」

マルウの周囲の地面を突き破り、植物の蔓がディルクロイに巻きついていく。

「……くっ！ 捕縛魔法か……！」

「まだまだあ！」

二人の周囲の大気が歪む。

マルウが急激に周囲の魔力濃度を上げて重力を増加させた。

^{アグラブル}
「鎖地母ッ！」

大気が、重りとなって二人に押し掛かる。

「お前……！ 自分までもろともに……！」

「く……ふふ……。こうでもしないと足止めできないからあ」

「お前は、メルザを苦しめたいのか……ッ」

「私はねえ、メルザちゃんの味方なの」

「だったら何故……！」

記憶を取り戻して、再び裁定者に立ち向かうとしたらそれはとても厳しい戦いになるはずだ。

特に、数百年前にはたどり着けなかった、裁定者のいる場所ではどのような困難が待っているか分からない。

そこに行くには、魔力のない身でないといけないのだ。何が待ち受けているか分からな

い所に、自分の大切な存在が行くなど、耐えられない。しかも自分は結界のこちら側で黙ってそれを見送らなければならないのだ。

だったら、いっそ記憶を取り戻さない方がいい。

魔力のない身に転生したならば、裁定者の放つ兵どもがアルメルザを襲うこともない。

「俺は！ メルザに生きていて欲しい！ それだけなのだ！！」

ディルクロイは一度脱力し、反動をつけて一気に自身の中で魔力を膨らませた。

黄金の閃光が彼に絡みつく蔓を吹き飛ばす。

「元勇者が元魔王にここまで惚れこむとはねえ」

「……悪いか」

「悪くなんかないよう。それはとっても素敵なこと。でもね、ディルクくん。間違ってる」

「なんだと？」

二人を縛り付けていた重力魔法を解除し、マルゥはディルクロイの目を見て言った。

「彼女の意思を無視するなら、それは裁定者と同じだよ」

ディルクロイは息を呑み、大きく目を見開く。

彼女の、アルメルザのかつての姿が脳裏によぎる。

自分のあずかり知らぬ所で自分の世界が動かされていくのは、嫌だ。

だからこそ、魔王であったものと勇者であったものは手を組み、裁定者を討とうとしたのではなかったか。

気づかぬうちに、自らの都合の良いように物事を動かそうとしてしまっていた。

それを許せぬからと始めた旅だったのに。

「だが、それでも俺は……」

力なくうなだれる男の、その向こう。

青く、高く晴れている空の、その一部が、裂けた。空が割れ、ちりちりと破片が落ちてくる。

マルゥとディルクロイの戦いを感知して、裁定者の一群が現れようとしていたのだ。

○ ○ ○

アルメルザは、石小屋の中で寝かされていて、スーが呼びかけても目を覚まさない。

「師匠、ねえ師匠！ うう、どうしよう……」

揺すっても、頬を叩いても起きない。本当に彼女は大丈夫なのだろうかと不安に思う。外ではマルゥとディルクロイが争っている様子だったが、今は何も聞こえてこない。

「師匠ってば！」

どうしていいか分からずただアルメルザの傍にいたが、石小屋の外で何か異変が起こったように感じられた。

溜めてある水桶の底が抜けたような、混雑した人の群れから、急に転がり出たような。違う空間に自分が進んだような感覚だった。

「……う、ん……」

その異変を察してか、アルメルザが目覚ます。

「師匠！ よかった！ 目が覚めた！」

「……スー？ ここは……私は……」

地響きとともに、何かが砕ける音が聴こえた。

何事かと慌てて外へ出れば、マルゥとディルクロイが空を見上げている。

アルメルザもその視線の先を見つめ、そして割れた空を見た。

「いったい何がどうなってるの……」

記憶が不完全なアルメルザにしてみれば、その空の裂け目が裁定者の兵が出てくる穴であることも、転生した理由が裁定者を倒すためであることも、裁定者の監視の目をかいくぐるために魔力のない体に転生したことも、何も分からないままだった。

この場で最も的確に情報を得られる手段をアルメルザは瞬間的に判断する。

「マルゥ！ そのぼっちゃりエルフ！ どうなってるの！？」

「名前だけでよくない！？」

「メルザ！ 受け取れ！」

ディルクロイは首飾りを投げて寄越した。アルメルザに渡すまいと、先に回収しておいた魔王の遺物。それは昔、旅をしていた時に彼が彼女に贈ったもの。

首飾りは紫紺の魔力を帯びて、彼女にかつての記憶を授けた。

「……裁定者……思いだした。あの裂け目の先が、目指す場所だった……」

空の裂け目から視線を剥がし、マルゥとディルクロイを振り返る。

「今なら、魔力を持たずに転生して、ここまできた今なら……あの先へ行ける。ディルク、私の杖を」

「メルザ……」

「心配しないで。……ってのも無理か。私も何があるか分からないし」

「危機を感じたら、すぐに帰ってきてくれ」

「ん、分かった」

杖を受け取り、「^{バルゴ}劫炎」と呟いて炎球を発生させた。そして杖に跨り、洞窟での時と同じように炎を推進力にして空の裂け目に向かうつもりだった。

「裂け目が閉じないようにこっちで派手に暴れておくから、その隙に頑張っ

「うん、頼んだ」

裂け目から溢れ出る、裁定者の配下兵。金属の触手を球状に絡めて、人面をつけたあの異形が、数百はくだらない量で落下してきていた。

「師匠、ボクは！？」

「スー、君はしっかり隠れてて。君には魔力がないから、直接は狙われない」

「何もできないの……？」

「いや。スーにしかできないことがある」

「ボクにしかできないこと？」

アルメルザは強く頷く。

炎球の内圧を徐々に上げながらしっかりとスーに向かって言った。

「私たちが信じて。今の世界を生きる君が信じてくれるなら。そしたら、それがきっと私たちの背中を押すから」

スーは何も言わず。唇をしっかりと引き結んで頷いた。

それを見届けてから、アルメルザは再び空の裂け目を睨む。

一筋の炎を射ち、彼女は一本の矢となって空を裂いた。

すさまじい速度で高度を上げていく。

落石のように降りしきる裁定者の兵団をかわしながら空を駆ける様子を、地面から三人は見ていたが、すぐに視認できないほど小さくなった。

代わりに、気味の悪い異形が降ってくる。

「スーくん。そこの石小屋に隠れて」

「その上から結界を張っておいてやろう」

マルゥは拳を構え、ディルクロイは剣を構える。

二人の後ろで、スーはこくりと頷いた。

物語の、最後の戦いが始まる。

【最終話：世界の夜明け】

昔も、こうやって空の裂け目に向かって飛翔した。

色々と試したけれど、空間の境目から先に、どうやっても進めなかった。

決して少なくはない犠牲を払って、魔力を持たない存在なら通過できること、魔道具の類なら通過できることを調べ上げた。

そこから自らの魔力を様々な道具に移し、最終的には魔力を持たない体に転生したのだ。

すべては、ここから先のため。

「今回は、進ませてもらう！」

裂け目が近づいたところで、ひときわ速度を上げる。

異形たちの間を縫って、境界面に一気に突入した。

○ ○ ○

そこは、夜空の中のような空間だった。

通ってきた裂け目を振り返ると、その亀裂の淵から次々と異形が生まれて裂け目の中に入っていくのが見えた。

地面もなく、空もない。音もしないし、熱も寒さも感じない。

試しに杖の炎を弱めてみたが、落ちていくような感覚はなかった。

「これが、裁定者の世界……？」

炎を消し、辺りを見渡す。

下方に裂け目が見える以外は、本当に夜空の中にいるような感覚だった。

浮いているような、そこに見えない地面があるような不思議な感覚。

「とりあえず、探索するしかないかな」

声に出したその直後。

夜が歪み、巨大な樹が姿を現した。

大樹。魔王城よりもなお大きいのではないかと思えるほどの巨大さでアルメルザを見下ろしていた。

「これはまた、予想外なのが……きたものね……」

葉の一枚も無い枯れた大樹は、どこか生命の進化を表した系統樹を思わせた。

樹の頂は見果てぬ先。

横に広がる枝々は、複雑な広がりをもって絡まっていた。

「自分が進化の体現者とでも言いたいのか？ 傲慢ね」

枝をじっと見上げていると、その一か所で黒い塊が実のように膨らみ、上から落ちてきた。

落ちた実は不快な音をたてて潰れ、ずるりと手足を持って形を成す。

人型になった黒塊は不自然な動きで関節を曲げ、ゆっくりとアルメルザに近づいてきた。

「異物、とは認識されてるのか」

杖から炎を放ち黒塊を灼く。跡形もなく消し炭になったそれを見て、こちらの攻撃はとりあえず通るようだと安堵した。

しかしその安堵も束の間。

あらゆる枝から黒い実が落ちてきた。

潰れた黒い果実は形を変え、あるものは人型に、あるものは獣型に、またあるものは鳥や魚に。

樹が、啼いた。

枝を揺らし、幹を歪ませて地平一面に響く音で。

それを関の声にして、黒が一斉に襲い掛かってくる。

「ずいぶん嫌われたみたい……ね！ ^{バルボ}劫炎！」

再び杖で飛行を開始する。視界を埋め尽くさんばかりの黒塊を、片端からアルメルザは相手取っていく。

炎を大きく形作り、そこから弾雨のように周囲を撃ち続ける。

「キリが無い……っ」

黒塊の群れは一向に減った様子を見せない。

地平を埋め尽くすそれらを見下ろし、大きく溜息をついたその時だった。

大樹の枝が大きくうねり、アルメルザに向かって伸びた。意識外からの行動に、一瞬だけ反応が遅れる。その一瞬が、この攻防の明暗を分けた。

杖を奪われ、枝がアルメルザを締め付ける。

「……ッ！ ぐあっ！ 枝も攻撃してくるなんて、聞いてない……！」

唯一の攻撃手段を、彼女は失ってしまった。

○ ○ ○

裂け目の下、現実の世界では変わらず触手球が大地を埋め尽くしている。

ディルクロイは広域魔法や剣術を駆使してそれらを相手取り、マルゥは一撃必殺、一撃離脱の動きを繰り返していた。

「うまくいったかなあ。メルザちゃん」

「さあ、な」

剣に黄金の魔力を込め、抜き身のまま姿勢を落として構える。

「跳べ、マルゥ」

「はいはい」

一閃。マルゥが飛びのいた所に斬撃が飛ぶ。

射程内にいた触手球は一体残らず上下で両断された。

「おー、数百くらいは一気にいったかなあ」

「まだまだ数は残っている。無駄口を――」

ディルクロイは異変を感じとった。

新しく降ってくる兵がない。

素早く上空を見上げれば、空の裂け目が半分ほどの大きさに縮小していた。

「マルゥ！ 様子がおかしい！」

「……どうなってるの」

このまま避け目が閉じてしまえば、アルメルザが帰ってくることはできなくなる。
裁定者の世界で何かあったのかと、ディルクロイに焦りが生まれた。

「うおおおおおおおっ！」

結界をつくる要領で魔力を爆発させ、周囲を囲んでいた兵たちを消し飛ばす。数えるほどしかその場に兵は残らなかった。

「やはり何かあったに違いない……！ くそ、あの結界を越えられれば……！」

「……ねえ」

静かに、マルウは言った。

「一つだけ、策があるの」

「よし、やるぞ」

「……内容を聞かないの？」

「ああ。だいたいの予想はつく」

「それじゃあ、スーくんのいる結界の中に一度退きましょう」

残っている触手球を蹴散らしながら、二人は急いで石小屋の一つへ向かう。

石小屋の中では、スーが両手を祈るように組んでいた。

入ってきた二人を見て叫ぶ。

「二人とも！ 終わったの！？」

「いいや、まだだ」

「君の力を借りよう」

ディルクロイが地面に剣を突き立て、マルウがそれに触れる。

「今から、この剣をメルザちゃんに届けて欲しいの」

「……ボクが？」

「俺たちでは、あの空の結界は越えられないからな」

マルゥが呪文を唱えはじめると剣は光り、同調してマルゥとディルクロイの体も輝いていく。

「魔力は全部剣に乗せるから、あとはよろしくねえ」

「スー。剣をとれ。そして行け。外に出たら、剣がお前を連れていってくれる」

「わか……った」

スーが剣の柄を握る。驚くほど軽く、そして驚くほどそれは熱かった。

生まれて初めて感じる、魔力の流れ。氷の国に入った時にマルゥにもらったマントが魔力の奔流を受けてはためいた。

「行ってくる！」

スーは駆けだす。高揚感と共に、後ろを振り返らずに。

彼が去った部屋の中で、がくりとディルクロイは膝をつく。

「行ったか」

「それじゃあ、最後の大仕事を始めようかあ」

剣に、すべての力を乗せる。

数百年前に呪いとしてディルクロイにかけたものも、彼がアルメルザに先んじて回収した魔王の遺物の権能も、すべて。

それはすなわち、解呪の果てに彼の死が待っていることを意味していた。

マルゥが長い年月をかけて食べ歩いて蓄えてきた魔獣たちの魔力。

それを術式を用いて剣に流す。それぞれの力を暴走させずに一つにまとめるために必要な代償は、マルゥの全魔力。

それもまた、彼女の死を意味する。

一振りの希望のために、二人は命を懸ける。

二人の体は輝きを増し、光に飲み込まれるように輪郭を失っていく。
そこに残った光の粒子は収まるべき場所を求めて剣の元へと向かった。

スーは集まってきた光の粒子に押し上げられるように空を駆けあがっていった。
勇者の剣を携え、深緑のマントを翻して。

それは、まさに物語に出てくる勇者その姿だった。

○ ○ ○

裁定者の空間では、アルメルザが抵抗を続けていた。

枝に絡めとられ、存在を否定されていく。世界の改変が行われたように、アルメルザの存在そのものを消そうと裁定者が彼女の自我を削り取っていく。

「私は……誰かの思い通りになんかならない……。私は……私だ……ッ！」

苦しみの中、存在が消えていく恐怖に抵抗する。

このまま、為すすべなく存在を削られ、何事もなかったかのように世界は管理されるのだろうか。

ふざけるな。

私が、私たちがここまでやってきたことを、すべて無にしようというのか。

「させない……世界は、誰かの都合で管理されるものじゃない……！」

目が霞む。

手足の感覚はとうに消え、この裁定者の地平に、今にも塵芥となって散ってしまいそうだった。

その視界の隅に、小さな光。
黄金色に輝く、力強い星明り。

「……ディル……？」

まさか、境界をどうにかして越えてきたのだろうか。
いや、かつてどれほど試してもダメだったのだ。でも、それならあれは、あの光は？

徐々に、光は大きくなる。
黄金と翡翠色の魔力を散らしながら、魔力の中にいたのはスーだった。

「師匠！ これを！！」

勇者の剣をアルメルザに向かって投げる。
それを阻もうといくつもの枝が群がってきたが、いとも容易くそれらを切り裂いて、剣はアルメルザの手に渡った。

魔力が爆ぜる。

すべての力が、アルメルザに集まったのだ。
かつての魔王の力も、勇者の力も、それらを繋ぎ止めていたエルフの力も。

魔力は渦となって枝々を押し折り、剣を掲げたアルメルザは縦に一閃、勇者の剣を振り下ろした。

次元そのものを切り裂き、大樹が割れる。
激しい振動と共にまたも樹が啼いた。それは、断末魔の叫びにも似ていた。

「……師匠、その姿は……」

「ああ、これが昔の私の姿だよ、スー」

身の丈はかつてのものに、深紅の髪と蒼い肌はそのままに、魔力の込もった禍々しい様相の角が二本。

けれど、スーと共に旅をしていた優しい雰囲気を感じた魔王の姿がそこにあった。

勇者の剣に視線を落とし、その柄を強く握る。

すべての権能と、すべての記憶は引き継がれた。故に、ディルクロイとマルゥがどうなってしまったのかも、はっきりと理解した。

「終わらせよう。すべて」

縦に大きく割れた大樹の幹に、気配を感じる。

「あの中に、裁定者がいる。行こう」

二人はそこが最後の地だと確信し、足を踏み入れた。

○ ○ ○

踏み入れたその先は、魔王城によく似ていた。

「……趣味が悪い。私の記憶から形成したか」

「どこに、いけばいいの？」

「玉座、と相場が決まってるでしょうね、こういうのは」

湧いて現れる裁定者の兵団は、もはや敵ではなかった。

炎を放ち、風で切り裂き、光で押し潰すその姿は、まさに魔王と呼ぶにふさわしいもの

だった。

果たして玉座にそれはいた。

輪郭を持たない、あやふやな人型。今にも消えそうな白い煙のようなものが、かろうじて形を留めてそこに存在していた。

「……あれが、裁定者なの？」

「ああ。感覚でわかる。世界を、解放してもらおう」

人型がゆっくりと膨れ上がる。

玉座の天井にまで届きそうな大きさにまでなったそれは、轟音と共に腕を叩きつけてきた。

「聖域降陣」

それは旅の初めに、勇者ディルクロイが魔王城に張り巡らせた結界。二人の周囲を包み、振り下ろされた一撃を難なく止める。

魔力で地を駆け、瞬時に裁定者との間合いを詰める。

手ごたえのない体に拳を突き込み、そこで翡翠色の魔力を爆発させた。

「聖導……二連撃！」

それはかつて、マルウの拳から繰り出された、魔力を浄化する破魔の拳。

裁定者は爆散し、それでも不定形であるそれは再び寄り集まってあやふやな人型へと戻った。

煙の一部が急速に形を変え、巨大な刃へと変じる。滑るように空を裂いたそれは、アルメルザの左の腕を肩から一気に切り落とした。

「師匠ッ！」

結界の中でスーが叫ぶ。

だが、アルメルザは顔色一つ変えずに右の手を傷口に当てた。

ノア
「活性」

瞬く間に、落とされた腕が新たに生え変わる。

旅の途中で軽微な傷を癒すにとどまっていた治癒魔法の、真の力。

「散らしてもダメか。なら……」

勇者の剣を高く掲げ、その先に灼熱を形成していく。

その大きさは玉座を埋め尽くさんばかり。結界の中にも、なお灼けつく熱をスーは感じた。

「灼ける……^{バルボ}劫炎ッ！！」

剣を振り下ろすと豪火球がおもむろに動きだした。

全てを巻き込み、玉座も、その後ろの壁も熱で溶かしながら魔王城に大きく穴を開けた。

裁定者の世界、夜のようなその光景が瓦礫の外に覗く。

「……やったか？」

「終わった……の？」

空間そのものが揺れる。

「この次元が崩壊する……？」

空間中に響く、金切り声。

失われた玉座から、天を衝くほど巨大な裁定者が見えた。

「でかい……！ 師匠！ あれ……あんなの！」

「何も、効いていない……！？」

世界を改変する、高次の概念である裁定者。

そこに物理的、魔力的な攻撃は通用しなかった。

絶望が再びアルメルザの前にそびえる。

どれほど魔力があったところで、そもそも文字通り、次元が違う存在なのだ。

それに加えて、圧倒的な質量の違い。

「あ、ああ……」

膝を折り、勇者の剣を取り落とす。

旅は無駄だったのだ。何も、変えられはしないのだ。そう思いかけたその時。

「ボクは！ 信じてる！！」

背後から鋭く声が届いた。

半ば絶叫に近い、心の底から絞りだしたような声。

「信じてるんだ！ 今の世界は、間違ってる！！ 誰のものでもないんだ！」

裁定者の動きが止まる。小刻みに震えながら、金切り声を短く何度もあげる。

その姿は、反逆に戸惑っているようにも見えた。

数百年の昔ではなく、今の世界の存在からも、否定される。

それは、世界の創造者、改変者としての在り様を否定されたに等しいのだろう。

対して、アルメルザはその声に勇気づけられた。

間違っていないと、今を生きる存在に力強く言い切ってもらえたのだから。

「スーは……いや、人間は、強いな」

立ち上がり、瓦礫の先端、今にも崩れ落ちそうな場所まで歩みでる。

「聞いたか。裁定者。世界に、管理者はいらないんだ」

激しい叫び声とともに、魔王城よりも大きな拳がアルメルザに向かって落とされる。
彼女は、それを避けるつもりはなかった。

「つまり、勇者も魔族もいないのさ」

両手を広げ、裁定者の拳を受け入れる。

アルメルザに直撃する前に、裁定者の拳は解け、絡まっていた糸がほつれるように裁定者自身も形を失った。

そして裁定者だったものはアルメルザに吸収されていく。存在理由の因果が揺らいだことで、裁定者に綻びが生じたのだ。

裁定者の存在概念を自らの中に封じ、彼女は静かに微笑んだ。

「さあ、今度こそ終わりにしよう」

そして黒く塗りつぶされた世界を背景にして、スーの方へ振り返る。

「スー。そこの剣を拾ってくれないか」

「え、うん……」

勇者の剣は、最期の刻を待っている。

「私を貫いて裁定者を倒して。私という檻の中に封じた今なら、それができる」

「な、なに言ってるの！？ できないよ！」

「スー。私は、世界を解放したい」

「でも、それじゃ師匠が……！」

一歩、アルメルザはスーに近づく。

「私は、昔の存在だよ。今を生きていいのは、今の存在だけ」

「でも……！」

「裁定者が消えたら、世界の管理のためにつくられていた存在も消える。スーの願い通り、災獣だっていなくなる。それに――」

「それに？」

「きっと、また会えるよ」

穏やかに、微笑む。それが偽りの言葉なのだろうということは、スーにも分かった。
アルメルザの決意が伝わり、自然と涙が溢れだす。

「今度会えたら、魔法、教えてくれる？」

「……ああ、必ず」

それは、叶うことのない約束。

スーにとってはしかし、その一言で充分だった。涙を拭い、勇者の剣の、その切っ先をアルメルザに向ける。

「ありがとう、忘れないよ……」

「うん、ありがとう、スー。新しい世界でも、どうか、元気で」

小さく頷く。

スーは目を閉じて剣先を突き出した。

アルメルザの胸を貫いた勇者の剣は、彼女と共に音もなく光の粒子となって白く散った。

空間に、ひびが入る。

主を失った空間が崩れ去ろうとしていた。

スーはその場に蹲った。

何もかも終わったはずなのに、何も考えられなかった。

風景が割れていく。

このまま、ここにいるのも悪くないと、スーは半壊した玉座の間に転がった。

○ ○ ○

意識を取り戻した時、スーは自分が玉座の間にいることに気がついた。

次元の崩壊はしなかったのだろうかと思問に思う。

「ここは……」

そこは、元の世界での魔王城だった。

アルメルザが魔法で吹き飛ばしたはずの玉座もある。

玉座には、彼女がずっと使っていた短剣があった。

触れると少し温かいそれを手に、スーは走った。

走って、走って、景色の見えるところに出た。

「日が昇る……」

山の向こうから、今まさに陽の光が射してきた。さきほどまでの世界とは対照的に、輝きはじめる世界。

世界は、解放されたのだ。

これからは、理不尽に存在が改変されることも、国が消えてしまうこともない。

自らの足で歩かなければならないのだ。

スーは短剣を胸にしっかりと抱き、世界を巡ろうと決めた。
彼女達が成し遂げたものを、自らの目で見てみたかった。

薄紫の空は、青く、高く染まっていった。

End.